

求道

第拾八卷
第壹號

五月號

現代思想の不徹底なる理由
本願を極力主張する所以
絶對の救ひ
解脱と常樂——『眞佛土卷講話』

大正十一年五月十日發行(毎月一回發行)

現代思想の不徹底なる理由……………(一)
本願を極力主張する所以……………(三)
絶對の救ひ……………(五) 近角 常觀…(五)

- 一 絶對、相對
- 二 相對の氣がつき難い一實例
- 三 私が相對に氣がついた順序
- 四 危險思想に就いて
- 五 自分が悪いばかりで解決のない状態
- 六 精神界に於ける相對性原理
- 七 原因は自分のかけてゐる眼鏡にある
- 八 絶對自力
- 九 『性を理解して哭る者あるまいか』
- 一〇 日本全國みなへら聞きなしてゐる
- 一一 悪しきを悪しく思はぬとなり
- 一二 彌陀の法水を流せ
- 一三 此方が左衛門辨圓となり、お慈悲の
方が聖人になる
- 一四 五劫永劫のおまことには如何な私も
腹ふくれて
- 一五 絶對の救ひのさま

- 解脫と常樂——『眞佛土卷講話』……………近角 常觀…(三五)
- 第一講 (承前)
- 一〇 無愛無疑
 - 一一 『如來に即ち是れ涅槃なり』等
 - 一二 『涅槃經』五味の譬喩
 - 一三 涅槃の醍醐味とは何ぞ
 - 一四 親鸞聖人と『法華經』
 - 一五 『慧眼無きが故に見ること能はず』
 - 一六 涅槃の四徳、凡夫の四顛倒
 - 一七 『大樂有るが故に大涅槃と名く』
 - 一八 『純淨を以ての故に大涅槃と名く』

●●●●●
毎日曜午前九時
●●●●●
毎土曜午後七時
●●●●●
毎月十五日午前九時慶信會
●●●●●
毎月二十八日午後七時鸞聖會

求道會館
(本郷區森川町一番地)

●●●●●
毎土曜午後二時

第一求道會
(九段坂佛教俱樂部)

現代思想の不徹底なる理由

○吾人は久しき前より思想問題の不徹底なる理由として、免角理想を追求して到達し得ざる努力主義と、自然其儘を是認して自由なりとして享樂する放縱主義とにあることを切言した。而して之を徹底的に解決するには、絶對信仰より外なきことを主張しつつあるものである。

○時勢は轉回して世人は眼光を宗教に注ぐ様になつた。特に親鸞聖人の人格を渴仰する氣運が來つた。併ながら思想は幾度も同一の軌道を繰返して歩むものである。亦親鸞聖人を理解する上に於て、理想主義を以てするものと、自然主義を以てするものとの兩傾向を生ずる様になつた。其結果折角絶對信仰に近きながら猶不徹底たるを免れぬは残念の至である。
○親鸞聖人の如何にも絶對慈愛の態度を以て、何人を

も同化廻心せしめられた事蹟を敬慕して、此の如き聖者の行爲を實現せんと努力する如きは、理想主義を以て親鸞聖人を見るものである。吾人は固より親鸞聖人の信仰の結果が、自然に此の如き事實を持來したることとは、深く信ずるものである。さればこそ『聖人』の稱呼を以て、渴仰措かざるものである。併直に其聖者の態度を模倣して他人に慈愛を施し、衆生を濟度し、以て社會の爲に奉仕するが親鸞聖人の精神なりと解するは、宗教としては寧ろ逆轉と言はねばならぬ。此の如きは所謂聖道門にして、聖人は自ら其不可能たることを自覺されたるが、他方救濟の信仰の特色であらねばならぬ。『小慈小悲もなき身にて、有情利益はちもふまじ、如來の願船いまさずば、苦海をいかでかわたるべき』の聖人の述懐が、如何に現代理想主義者の見方が

聖人の實際と正反對なるかを證據だてるに十分である。

○此に至りて理想主義の缺點を見ることが出来る。蓋し理想が高ければ高き程、益々實現の不可能なることを自覺するものである。理想主義が碎けぬのは、其理想が低いからである。若し絶對の理想を實現せんとすれば、相對界に於ては何人と雖不可能であるが、寧ろ當然と言はねばならぬ。法然上人や親鸞聖人が、其實際に於て當時の高僧碩徳と比較して、徳が少なかつたのではない。畢竟絶對の理想を實現せんと試みは、遂に愚痴の法然房、愚禿親鸞たるの自覺を促したるものである。全體自力無効といふことは、絶對の見地より見て不可能といふことである。否寧ろ自力作善といふことは、自己の罪惡を自覺せずして、憍慢貢高の態度を持つることと謂はねばならぬ。かくて理想主義は聖人の絶對他方に對して、正反對の行き方に陥りて居る事になる。

引き出したるが如く、煩惱の生活を描き、人間の暗黒を告白するだけに止りて、何等救済されたる經驗の伴はざる自然主義と成り了することになる。全體救済の內的實驗、信樂開發の一念を経るに非らざれば、決して

本願を極力主張する所以

○眞實なるものは永久不變である。最も古きものは最も新らしきものである。聞其名號、信心歡善を以て眞宗の至極とするは、此信樂開發の一念を最要とするからである。而して此一念徹底を促し來る原動力は、即ち如來の本願即ち誓願不思議であらねばならぬ。親鸞聖人が『教行信證』信卷の別序に、『夫れ以みれば信樂を獲得することは、如來選擇の願心より發起す』と喝破されたるは千古の鐵案である。

○抑々信仰徹底の最大要件は、如來と衆生と對立の形

○かくて理想主義は不可能なることを努力實行せんとするものなるゆへに、其裏面には必ず其行きつまりは、自然主義を伴ひ來るものである。何んとなれば遂に自然の成行に放任し、自分の思ふ儘に行ふ事が、救はれたるものとせねばならぬ様になる。今日親鸞聖人を渴仰するもの、多くが、諸種の形式に於ける自然思想に陥りて居る。或者は吾々の人生其物を如來の恵なりと説き、或者は吾々善惡の行爲其儘を佛の力なりと考へ、或者は宇宙の實在、自然の現象其物を如來の實體なりと云ひ、其他光の生活と云ひ、矛盾を調和と云ひ、煩惱其儘人間其儘が救はれたる者と云ひ、永劫の昔より光明中に攝取されたる我等なりといふ様になる。かくて此思想は罪惡、業報、煩惱其物が慈悲、光明、攝取であらねばならぬことになりて、初めより救ふ如來と、救はるゝ衆生の區別なきものゆへ、我手を以て我身を引上げんとするが如く、不徹底に陥らねばならぬ。かくて頑石を庭中に横へたるが如く、鬮より牛を

て罪惡觀も懺悔心も起るものではない。然らば如何なるが親鸞聖人の眞信仰であるか、如何にして此現代思想を徹底せしむべきか、是刻下の急務である。

式に於て成立たねばならぬ。然るに理想主義の衆生の努力追求のみに止りて、如來の力を認めず、自然主義は如來本來の攝取を説き、衆生の救を認めぬ。然るに此の如く流轉沈淪する衆生に對して、無限大悲の招喚の勅命を説きたるものが、實に本願他力眞宗である。即ち迷へる子に對する切なる親心其物が選擇願心である。飽まで捕へずんば止まぬといふ誓が徹底の力である。是が願力である。鎮西派の思想は、親を求むるのみにして親の喚聲なく、西山派の思想は、如來の

正覺を取りたまひし十劫の昔、我等は助かり了れりと考ふる故に、不徹底に了るのである。親鸞聖人は、其切なる如來の御心は、徹底せずば止まぬといふ誓の弓を張りつめて、名號の矢を以て我等衆生を待受けたまふ勅命なるがゆへに、聞其名號の立所に、一念信樂開發せざる可からざる所以である。古より歸命を解して。衆生が生命を捧げることとするは、鎮西派の理想主義である。如來正覺の生命に歸ることとするは、西山派の自然主義である。而して本願招喚の勅命を善知識に遇ひて聞き開くとき、歸悦信順するが、即ち親鸞聖人の眞宗である。信卷に願成就一實圓滿の眞教、眞宗是也と道破せられたるが、如來の勅命に信順する眞心徹到の金剛心である。

○然らば徹底の原動力は、本願招喚の勅命にあることを極力主張せねばならぬ。『若不生者の誓ゆへ、信樂まことに時どり、一念慶喜する人は、往生必ず定まりぬ』といふは、岩をも貫ぬくべき、誓願の弓の弾力の徹底

を説きて余蘊なきものである。然らば如何なる時矢が弦を脱するかといふに、『十方諸有の衆生は、阿彌陀至徳の御名を聞き、眞實信心到りなば、おほきに所聞を慶喜せん。』即ち聞の一念である。衆生佛願の生起本末を聞き、疑心あることなし、是を聞と曰ふ。聖人が信樂まことに時どり云ひ、眞實信心到りなばといふて、信に何等努力を用ゐざるは、徹底せんと努力するに非ずして、聖人が眞の善知識たる法然上人に遇ひたまひ、如來選擇の願心聞き、佛願の生起本末を受得したまひし時、眞心徹到して信樂開發されたる一念を示されたるものである。故に信心と言ふは本願力廻向の信心也といふ所以である。至心に廻向せしめたまへりといふ、聖人内の實驗其儘が、千古輝ける聖人の經文の體讀心讀となつたのである。

絶對の救ひ

近角常觀

一 絶對、相對

『絶對』は言葉が既に絶對故、一寸表はしにくいのであるが、親鸞聖人の語には、
本願一乘海を按ずるに、圓融、満足、極速、無碍、絶對不二の教なり。(行卷)

聖人には斯く常にある處の言葉である。爾る處近時世上でも頻に用ゐられるやうになつた故、誰しも常に言ひ慣れてゐるのであるが、併し彌々信仰上眞の絶對の味ひを諒得し、之を味はせて貰ふといふことは、一寸六つかしい處がある。即ち今回は、そこを申さうとするのであるが、この絶對を話すには絶對ならぬ方、即ち相對の方を申上げ、相對の充分で無い方をよく諒解して頂けば、自から絶對でなくてはならぬ味ひが、分つて頂けやうと思ふ。

相對とは常にいふ五分々々のこと、即ち我々が善

き悪しきにつけ、常に五分々々の心がある、あのことである。處で色々のことをいふやうになるが、他方の信者に一般に有り勝ちな間違ひ——間違ひとまでゆかずとも不充分なところは、『佛のお慈悲を聞いて有難いと頂くのである』といふこの頂き方である。この言葉はよく頂けば差支ない言葉にはなるも、先づ大低はこの言葉の上には、『佛が廣大な慈悲で向はれるの故、それを此方に於ても難有く頂き、受けんならぬのだ』と思つて居る處がある。即ちそれだと此方に於ても有難く受け、挨拶せんならぬのだといふ氣持ちであつて、之が即ち相對である。これは道徳にありても、道徳は皆な相對で、『人が斯く親切に仕て呉れるから此方に於ても斯う』人があゝ仕てくれるから、此方も斯うと、斯く總てが相對の道徳である。ちと言ひ過ぎるかも知れぬも、佛に對してもこの氣分で、有難いお慈悲故に有難

いと受け、頂かんならぬと、敢て仕返しするとまては思はぬも、知らず識らずの間にこれになりて居る方が、少く無からうと思ふのである。

絶對とは何うかといふに、有難いと頂く可き故、有難いと頂くので無い。此方は有難く思へ無いのを佛より哀れんで下さるお慈悲が絶對なのである。それを此方が有難いと頂かれて、初めてお慈悲は頂かれるやうの氣持ちを持つから、『私は頂いて居ります』居りませぬ』などの問題が起つて来る。その『有難く頂いて居ります』が、傳統的に普通信者が言ふやうの『有難く頂いてゐる』はあらうが、然らばそれが『眞底から然らう思へるのか』と念押すに、『どうもそれが實は心ぞこから然らういかぬので困つて居る』といふが、大抵の人の心狀である。するとそれは佛の慈悲故有難く頂かんならぬの五分々々の信仰では、本統には安心は出来ぬ。寧ろ如何にしても眞から有難く思へぬので行き詰つて居るが、それらの人の本統の處となつて居るのである。然らばその有難くなれぬに對し却てそれを哀み、其者を見捨てぬとのお慈悲が佛の恵みなのである。も一つい

がついて見ると、人に張り合ふ心が消えて仕まつて、此頃は決して人中で悪口を言はぬ。随分人から苦しい目に遇はされることあるも、此頃は心がころつと一轉して仕まつて、それに手向つて行く氣が起ら無い。處て聞き度いのは先達でも、斯く自分が悪かつた〜と思ひ〜家に歸り、一晚中悪かつた〜で終にひと目も眠れ無い。あれも申譯けがなかつた、之も申譯けなかつたで、終に夜が明けて仕まつたのである。翌朝になつて妙な氣持ち。今迄五分々々で随分人と激しくやり合つて居る時も、夜眠れぬの何のといふことはない。處が今度は信仰を口にしてゐた者が、大に悪かつたと氣がついて、今度こそ安かになれそうなものと思つて居たのに、今度は却て夜眠れないとは何ういふものであらうか』と、斯ういふ尋ねであつたのである。こは人の尋ねを直ぐ無遠慮とは思ふたも、漠然たることといふよりも、と思つて持ち出して見たのである。

即ち人が悪口するからとて、此方もすぐ悪口でゆくは、それはもとより五分と五分との角突き合ひ故、それの善く無いことは誰にも分る。併しこの方の如く人が悪しく向つたに對し、『如何にも自分が悪いのぢや』

へば有難きお慈悲に對して有難く思へれば義務が濟むのであるも、思へぬからいかぬと此方は五分々々になつて居る處に、その思へ無いを哀み給ふが故に、佛よりは五分々々に出ずに、『その思へない處を哀はれんで下さるお慈悲である』と、之を聞かせらるれば、『思へ無いのを捨てぬとのお慈悲であつたか、成る程それは有難い心であつた』と、初めてお心が頂けると、斯うなるのである。之が絶對と相對との氣持ちである。

二 相對の氣がつき難い一實例

處がこの相對が色々な形になつて現はれて来る。眞宗の俗諦門なども大抵がこの相對的になりてある。一寸茲で一例を持ち出して見る。

先達でも或る人が聞かれるには、『何うも自分は長い間信仰を聞くも、自分は頂いて喜んで居るの考で、人が何か言ひ出すと、直ぐ信仰を振り廻はして、人に信仰で五分々々にいつてゐたやうに思ふ。氣がついて見ると他力の恵みを聞く處の者が、人が何うあらうが、それに五分々々に出て居たといふは善くないことである。之は自分が悪かつたと大に深く氣がついた』と、マア斯ういふのである。そこで斯く『自分が悪かつたと氣

と頭下げると、こは五分では無いではありませぬか。寧ろ道德的には大に尊むべきことと言はなくてはならぬのである。最も一般信者の人の間にも、『人が自分を悪くいふけれども、自分は悪く無いけれども、言ふと喧嘩になる、黙つて居さへすればよい、南無阿彌陀佛々々々』と、こんなのはあるかも知れぬ。こは言はぬ丈け心には大に貯めて居るの故、これの五分々々であることは直ぐ分る。處がこの方は人が悪く言ふ時に、『成る程自分が悪いのぢや。』實際に自分の悪しさばかり出て来るの故、一寸、五分々々ではないやうなのである。それで居て相手が控へるか。却々控へぬに『自分が悪いのぢや、〜』と頭下げて行かれるの故、道德的には一通りのことと無い。それで居て心がらくになるか。ならぬのみならず妙に心が煮え反えるやうになりて、夜眠れない。随分面白い經驗と思ふのである。こんなことはこしらえて出る話で無い。實地の話故尊いと思ふのである。

私などこんな話聞かせらるゝと一寸面喰らふ。何ういふてよいかと思ふ位である。その人の言ふ處を聞くに、實際に然らういふ場合、人の罵るを更に不足と思ふ

心を起して居らぬ。不足心が出無いのに『自分が悪い』、『今迄斯んな時ガミ々やつたのであるも、他力信者のす可き事柄では無つた。全く自分が悪かつた』と、斯く悪しくて頭下げて居るの故、心を押へて下げて居るのでは無い、努めて控へて居るのでは無い、併し矢張り心に何處か安心されない點があるの故、氣をつく可き處があると見なくてはならぬのである。

て私が言ふたには『貴方、自分は善く仕てると思つて居る處があるのだらう。』處がその人自分が善くしてると思つて居らぬ。その人『自分はよきも人が逆らふから控へて居る』と、それなのならば『自分は善く仕てゐるの故、善きことして更に自分に思つて居らぬ。併しよく／＼考へて見るに矢張り之にてその人自からは氣づかずに、それになつてゐる處があるのである。それは何處かといふに、その人自身の心持ちを言ふならば、それは成る程『自分は慈悲を聞き念佛してゐる人間が、設し人が如何に彼れ是れ言ふからとて、それに取り合つて此方も五分五分のいさかひやつて居つたは悪かつた』と、知らず識らずの間に自分を控へ『悪

い／＼』と思つて居る、その心は決して自分は善くして居るには思つて居らぬのであるも、矢張り人が『彼れ是れ言ふからとて、それに對して此方としては悪しく思ふは善く無いから』と、一寸形からは五分五分に見えぬのであるも、矢張り之で茲て五分々々になつて居る處があるのである。

即ち人が悪しくするを悪しく受けるのも五分、人が悪しくするを『自分が悪い／＼』と受けるのも五分。即ちこの人の『悪い／＼』と、自分の悪しさばかりが溜つて仕まつて、自分の悪しさの處置のつけやうがなくなつて仕まつた状態である。即ち自分の悪しさを何處で晴らしてよいか分らぬ。やくざ店が之も悪い、あれもいかぬと、残らずの品を賤しつけられて仕まつて、手も足も出ぬ、といふ恰好なのである。之がマア相對の分り難き一例である。

三 私が相對に氣のつき出した順序

そこで斯ういふのになると、自身に斯うした不審を持つ人には分るも、持たぬ人には一寸分りにくい故、一つ斯ういふ心状になる順序を言つていつたがよからうと思ふ。何しろ信仰の話は微妙な心の働き故、餘程

冷かにしなければ、自分で自分の心の有様が氣がつき難い處がある。そこでマアこれらも我々の平日の日暮しの心持ちよりいふていくとよと思ふのであるが、それは私自身の經來つた心持でいふより仕方がないの故、矢張りいつもと同じ話になつて仕まふのであるが、

先づ第一に私など、何ういふところから信仰に向ふやうになつて行つたかといふに、誰しもが初め日暮しに於ては出来る丈けよく心懸け、正しいことの爲に努力せんならぬと考へると同じやうに、私なども道德的生活、——然ふいふのもちと嗚呼がましいが、そういふ方の心の向きて居つたのである。即ち我が有縁の宗教の爲め、何は措いても盡さなければならぬ。勉強をするのも宗教の爲め、あれをするのも宗教の爲め。よし自分の身命は捧げても、この佛教さへ更に興隆することが出来ればと、それで遣つて居つたわけである。即ち茲は私丈けてない、誰もが初めはこれとやつて居るわけである。してその時何う思つて居つたかといふに、斯のやうに眞地目に考へて居るのは、自分として本統に眞地目にやつて居ると、斯う思つて居つたのである。そ

してその時、それが相對のよき事であるとは思つて居らぬ。自分は絶対に、その爲め身命投げ捨て、更に不足と思はぬと思つて居るの故、それが相對のものとは夢更思つて居らぬ。自分が斯のやうに眞實にするのが『然うするから人にも見て呉れ』自分がするから人も仕なければ——然う考へてのことならば、それは五分々々でもあらうも、自分のはそれ思ふて居らぬ。自分が眞實にするから人も仕てくれとは思つて居らぬ。人と仕較べの心持ちでやつて居るのでは無い。人は何うあらうが、自分丈けが少しもさせて貰へればと、それで遣つて居ると思つて居つたのである。

處がその如くそれでずつと、身を捨て、遣り通うせれば、如何にも私は絶対に、眞に眞實の塊りであつたわけであるも、如何せん人間故段々缺陷も現はれて來、出來る事柄にも自から限量がある。その中、そ／＼は學問も怠けて居れぬとなり、さて然う／＼はもう身體も續か無い。第一身體が既に絶対に無いの故。斯くして種々の事柄から段々行き詰つて來、故障が現はれて來て、初めてそこで今迄の絶対になかつたことに氣がつき出したと、斯うなつて來たのである。それは何うだ

つたかといふに、

『自分は斯のやうに生命がけて佛教の爲にとやつて来て、いつ迄やりても効果が見えぬ。自分は兎に角、玆までやつて来たが、他の友人達は口先さばかりで言つて居て、自分の如く身を差し出してやるなどのことは仕ない。自分のやうに學問も何も、自分の身體までも投げ出して遣つて来て、——やつたことは構はぬも、やればやる丈け無駄になつて仕さふばかりで、世の中は自分の爲めばかりやるの方が、結局押していく處がある。すれば如何程やりてもやればやる者程損で、損は厭はねども斯く悉くそれが無駄になるとすれば、随分世の中は變なものでないか。』斯ういふ思ひが出るやうになつて来たのである。處て斯く思ふやうになつて来たといふことが、實いふとそれまで私の心に『自分は何處までも身捨て、一身を犠牲にして、不足と思はぬ』——大にこれ自分ではやれてると思つて居た處に、意外にも玆まで来たなら、思ひがけない不足が起つて来て、自分を見て呉れる者のないことが、甚だ心淋しくなり出したといふわけである。自分は人のことなど離れてやつて居るの故、人のことなど構はんと

いうて居た人間が、大に人のせぬことを不足に思ひ出したといふわけである。すると今まで身捨て、など言つて居つたも、本統にそれが出来てゐたかといふに、自分の思惑ではする積りて居つたのであるも、それは然うしてれば彌々になれば『人が認め可き筈』——も一ついへば『此方としては認めよとはいはぬも、人としては認めべき筈』と、この心でやつて居つたといふことに成つて来て、さすれば『いうてる自分の方が本統に出来てゐなかつたので無いか。』『自分の方が勝手な名譽心でやつて居つたのでないか。』斯くして今までやれてると思つて居つた處のものが、殘らず變なものであつたことに氣がついて来たといふわけである。

四 危險思想に就いて

そこで言はねばならぬのは、玆で自分の惡しさを思はず、人を悪いと考へて仕まふのが宜しくない。近頃の時代思想は之になつてある。私のは人を惡しく思ふやうになつて来て、然ういふ思ひの起つて来る自分の方に目を着けて来たわけであつた。此頃の時代思想は『人が氣に喰はぬ』と、何處までも人と突つ張り合ふのみで、それでは如何なる者でも周圍を相手ど

り、社會を相手どり、一つ／＼に喧嘩してゆくより仕やうが無い。仕舞ひには相手は澤山にふへて來、此方は自分一人で、相手々に喧嘩して行かなければならぬとなれば、如何なる者も終には仆れて仕まはねばならぬになるは決つてある。故にいつまでも『闘つて行かねばならぬ』が我々の思想では困る。處が此頃は世間一般の思想に『飽く迄もそれを遣り通す』この思想があると思ふのである。

實は私は今日の世間一部の思想にも理解を持つ。マア私の話を讀み聞きして下さる人の中には、所謂信者あり、實社會に活動して居られる人あり、また思想問題にも心を向けて居られる人達もあらう故、各方面に言はなければならぬ。私は今日の五分々々で、何處までも戰つて行かうといふ思想を、一にも二にも危險思想として斥げんとするは、甚だ理解ないことと思ふのである。何となれば、私が宗教の爲め盡す／＼と言つてた間は、私は何處までも眞地目な、所謂犠牲的精神の人間だつたのである。處がそれでやりて／＼やり抜いて、終に最後に不足起して仕まつたといふは、初めの理想では自分捨て、何處までも遣れると思つて居つ

たのが、その如く實行し／＼、終に最後に自分が破れるまで實行して、とうとう自分が立たなくなつて仕まつた譯けである。即ち如何程盡しても『之では詮無いてないか』斯ういふものが現はれて来たわけである。之を今日でいへば即ち自我に目醒めたと言はんか。また『斯うしなれば、あゝ仕なければ』の道徳よりいへば、眞地目に實行せんとすればする程、我と我が心を裏切る『自分が／＼』といふものが仕やうやうが無くなりて、即ち今日の思想問題に於て、何故子供が親のいふことを聞かぬか。『聞かんならぬ／＼』と何時まで聞いて居ても切りなし故、終に最後に『聞き切れぬ』といふものが現はれて来たわけである。『お前は勞働者ぢや、働け／＼』——いつ迄下向いて働いて居ても、いつまで経つても何うにも仕て貰へやうが無い故、資本家があゝ斯うと言はなくてはならぬことになつて来たのである。之を兵隊にすればいつ迄戦ひに出て戦つて居ても何うにもなりやうなく、然るに上の人は勳章貰ふと、斯ういふ風に考へて來れば、今日の一部の思想も理解される譯けである。全體危險思想々々々と言つても、それが出て来る源を窮めて、それに對して安心

の道を立ててはいかぬ。唯徒に危険思想々々々と、一にも二にも排斥することによりて、危険思想は亡びるもので無い。

そこから見ると私など、却て前の時期の方が危険思想だつたと思ふのである。『イヤ人が腐敗して居る、宗教が腐敗して居る、斯う仕なくては、あゝ仕なければ』——自分の理想ばかりでやつて居た、その時代の方が餘程危ぶなかつたと思ふのである。處がそれで遣りて、終にやり切れず、最後に『真面目な者程損づるゝ者程徳をとる』と、——之を今日の思想に打ち出せば、今日の社會に反抗氣分の起つて居るはこれである。全體、世間、社會といへば廣い。併し世界の思想、社會の問題も、もとは一人々々の心より起つて居るの故、我々自分々々の心を辿りて行けば、世界、社會の問題も自から了解される譯けてある。

五 自分が悪いばかりで解決のない状態

處で斯れ丈けては唯反抗思想が起つて來るといふまで、その解決がついて居らぬ。互にあゝ斯う反抗し、日米いつまでも衝き合つて居る丈けならそれまでである、今一步深く考へて見なくてはならぬ。何う考へ

るか。

先きいふ如く私は宗教の爲め自分の身捨て、生命捨て、更に惜しく思はぬと言つて居つたのでせう。處がその如く實行するには學校やつて居つた私は、學校捨てなければならぬ、勉強離れなければならぬ。段々その如くやつて行つたとなれば、終に最後には私の心には『あゝ惜しいことをした、残念な』といふものが現れて來る。即ち然らしたことを人が見て呉れなければ満足されぬものがあるのである。即ち身捨てゝなど言つて居つたのであるも、ちつとも捨てられてや仕ない、大に見て貰ひ度いものを藏して居つたわけである。こゝ中には『自分は十が十まで見て貰ひ度いとは思はぬ』と言ふ人があるかも知れぬ。けれども物質に損するにせよ、名譽に於て徳するとか、何か彼か代價を得やう／＼として私共決して只では物を出して居らぬ。即ち今までのこと皆なこのよく思はれ度いので遣つて居つたことゝ、茲に氣がついて來たが三度目の氣づきである。こゝがなくては話が真面目にならぬ。私など茲に早く氣がついたは、もと宗教をやつて居つて、自分に一つの理想を立て、『信ずることの爲めには身を

捨て、悔ぬない』と、大にこれ自分ではやれて居ると思つて居つた處に、斯く彌々となりたら捨てられぬい、見てほしい——斯うなつたの故、今まで人に見てほしいの爲め仕て居るとは思はなかつたも、斯うなると『皆な名譽の爲に仕て居つたのであつた』宗教の爲めなど言つて居つたも、『自分は宗教の爲めに仕て居るの誇りの爲めであつた』と、茲て人が悪いの問題よりも、自分が悪いの問題に轉じ變つて仕まつたのである。すると人のこと彼れ是れ思つて居つたも、『思ふ自分の方が悪かつた』と、即ち先きの方が今まで何ぞといふと人と争うて來たも、『争うた自分の方が悪かつた』は、この三轉の處になつてゐるのである。即ち自分の悪しさに、初めて目が着いた處となるのである。

處で斯れが道徳的には甚だ高尚である。今まで人と争うた人間が、人が悪しく向ふのに自分の方は控へるの故、外面からは非常な變化である。けれども心には安心が無い。寧ろ前の時には、苦しいとても身體丈けてある。心には我が言はんと欲する處を遺憾なく行つて居るの故、心に苦は無い。飽くまでも我慢を張つて、

戦ふ丈け戦ふてゐる丈けである。處が斯うなると今度心は苦しい。『今まで自分は犠牲的だの献身的だのと仕てもせぬのに、見て貰ひ度い爲め言つて居つたのである。恰も代價を取つて居つたことに、一つとして善いことがあるわけはない。それを理想を行つて居るなど自惚れて居つたは大間違ひ。宗教を腐敗してゐるなど言つて居つた自分の心が腐敗してたので無いか。名譽心でござ／＼して居つたので無いか。そんな心で人を悪しく見て居つた自分の方が相濟まぬ』と、自分の悪しさには頭下つたのであるも、悪いばかりで一つも解決といふものが着いて居ない。即ち『悪かつた』『困つた』で心の底が煮えむくる。斯ういふのを何うするか。斯ういふ方が澤山あらうと思ふのである。

餘程已前のことであるが、或る方が人に善くして人が有難く思はぬ。不足に思はれて聞かれた時私が申上げたには、『貴方の方より善く仕てやつた』とそれ思ふのがいかぬで無いか。飽くまで眞實によくするのなら、先方が受けぬかて苦に病む筈は無い譯けてある。それを「仕てやつた」と、その位なら仕て貰はな

かつた方がよかつたと言ふかも知れぬ。仕て呉れと頼みもせぬに仕て置いて「仕てやつた」と、大きな世話だといふかも知れぬ。それは「仕てやつた」といふものでなく、「貸して置く」といふものである。必しも金で貸したから金で返へせとは言うて居らぬかも知れぬが、此方が出してやつた親切を、先方が戻さぬのがいかにぬといふのなら、先方は先方で借りた物なら有難く思はいてよいでないかと言ふかも知れぬ」と。處がその人の話で成る程と氣づかれると、それから「自分が仕てやつたといふ考を起すのが宜しく無い」と。何か人に親切を仕てやつては、あとから「仕てやつたと思ふ自分がいかぬ」と、その人非常に損な立場に立たれたことがある。即ち人に善くしては頭を下げ、人に善くしては頭を下げ、すると人は感心な人として敬服するも、その人自身は心の中が苦しくて仕やうが無い。先きの方も即ち之である。斯く擴大して考へるとよく分る。

六 精神界に於ける相對性原理

處て之が苦しい原因は矢張り何處迄も相對的關係にある處にある。即ちこの場合、初め人に善くするは、

「すると人に善く思はれる」と仕てゐるのである。處が次には一步進んで「その如く仕た」と思ふがいかにぬのだ」と深遠入りし、すると「人が有難く思はうが思ふまいが、此方からはよく出来なくてはいかぬのだ」となるが、處が我々それが出来なからいかぬ」と、斯く茲何處までも五分々々で動けなくなつてゐるのである。殊に我々の道徳には、自分が悪かつたと氣がついた場合には「悪いは止めなくてはいかぬ」といふものがある。——マア今一度言ひ直せば、初め我々が人に善くした、人が悪しく受けた。先方が悪いからとて此方も悪しく向ふは五分々々故、此方はそれによく向はなければならぬ。ならぬが我々にはそれが出来なない。出来なないは即ち悪となる。悪なれば即ち止めなければならぬ。悪と分つて打ち棄つて置くことは出来無い。出来ないが如何にしても止められぬ。止められぬは彌ふ以て悪となる。よしまた假に止められたに仕た處が、止められれば今度は自分はよく仕たといふものが起つて来て、その善く仕たと思ふのが即ちいかぬのだとなる。斯くして人間は何處々々まで行つてもこの五分々々で、その爲め人生が立ち難いと、斯うなつ

て居るのである。これが皆な一つ『五分々々』の爲めであることを氣をつけなくてはならぬ。

マア茲は斯く五分々々で、善し悪し何處までも無限の戦ひが續いて行く、然ういふものが人生であるといつた方が早い。故にトルストイは斯く五分々々で争ふ、それがいかぬの故、この五分々々を離れ、無抵抗に仕なければ人生に平和は來ぬと、斯れば慥に一面の眞理である。けれどもその無抵抗が眞に行へるか。無抵抗にすればする程、『先方は抵抗して來てゐるに俺は無抵抗に仕てゐる』の一種の抵抗となりて、何うしても茲相對五分々々を出ることが出來ぬのである。故に何程先方に譲りて考へてみても、如何にしても自分自身の安心が成り立たぬ。これがマア今日少し心ある人に最も多いであらうと思ふのであるが、——

殊に分りにくいのは、形に悪しく現はれてゐる、その悪いことは直ぐ分る。人が腹立て、向ふのに此方も立てる、その方の悪いのは分りよいが、人が悪しくするのに此方は優しく行く、これが悪いには一寸思ひにくい。電車に乗らうとして人に會ひ、人より先きに乘る方の悪いことは誰でも知つてゐるも、『まあ』

と譲り合ふ方は誰でも善いに思ひ易い。處がこの教は、聖人のちほせには、善惡のふたつ、總じてもて存知せざるなり。(歎異鈔)

悪ばかりでない、善もいふてある。五分々々の善だと、善も一つの罪惡だと仰しやつてゐるのである。即ち我々のは善惡共に五分々々たるを出てぬ。早い話が強くなる人には何れ丈けても強くゆけるも、優しく來る人には優しくしかゆけぬと、之が皆な一つ『五分々々』だからである。所謂この世の義理に苦むといふは之であつて、人情にしてもさうである。子供が死ぬ時何故親が堪えられぬか。死ぬる子供が自分を慕はねばらくなのであるも、死ぬる子供が「あゝ斯う」慕ふから、此方も「あゝ斯う」堪えにくいと、生死愛別皆なこの五分々々になつてゐる。即ち義理といはんか愛情と言はんか、此頃は學問上にて相對性原理といふことが言ひなされ、之によりて物質界の原理を言ふことになつて來たが、こは我々の精神問題の上に於ても、この相對性原理といふことは成り立つ。即ち子が親を、親が子を、人があゝ仕た、斯うしたの問題が皆なこの五分々々で、即ち相對性原理の働きたるを出てぬ。乃至、政

治、實業、軍事、外交、——因果應報に至るまでが、善いことすれば善い結果が来り、悪いことすれば悪い報ひが来るの故、即ち之も五分々々である。斯くして何處々々迄も相対性原理に縛られて、出ること出来ぬとなつてゐるのである。

故に一體佛教の證なることは何うかといふに、私共の時代には世間の學問の立場より佛教を誹難する者があつて、佛教は子を捨て親を捨て、國を棄て家を捨て、何處までも世間をなみする宗教というたものである。言はれてみると成る程財を捨て妻子を捨て、出家發心捨家棄欲。世間の國を富まし、商工業を興すとは大分反對である。その爲め印度が亡びたと言はれ、ば、成る程然うかなとも思ふたものであつた。處がこの親を捨て子を捨てねばならぬは、この五分々々を捨てねばならぬとのことだつたのである。恩愛を棄てねばならぬとは、親が子を、子が親を、互に五分々々て引張り合ひ、流轉して行く、その恩愛を斷つたのであつたのである。生死を離れねばならぬとは、死はイヤ生はよいの、その相對を離れば解脱が得られるとの意味だつたのである。すれば本來佛教の精神はこの相對を解脱する處

と考へれば、『その仕てると思ふのが、いかぬのだ』と、これで動きがとれなくなつて仕まつたのである。そこで心に上つて来たことは、——
『兎に角自分はよいこと仕やうが何しやうが己が』といふこの我慢心がある。要するにこれがあるから、總てのことが皆な變なことになる。『自分が斯んな具合に之さへ無くなせたら本統に救はれるのだが』と。殊に然らなると神經も甚だ鋭敏になつて来て、人の思惑を彼れ是れ頻に氣にするやうになる。『自分が斯んな具合になつて、定めて人も變な目で自分を見て居るであらう』と、彌々益々五分々々の心は加はつて来て、如何にしても隔て心が止めきれない。最後に何う思ふやうになつて来たかといふに、『斯く人の心を疑ひ、さぐり、如何にしても隔て心が止められぬのであるが、若し人如何に自分のことを思ふにせよ、それを氣にせぬやうになり、無我の心になることが出来るとしたらば、何れ程らくだらう。自分が己がといふことを思はぬやうになり、何程人が悪しく仕向けやうと、それが此方が氣にかゝらぬやうになれたとしたら、如何程悪しくいふ者もその中には退屈して、おのづから問題は自然消

にある。佛教の眞髓、宗教のうま味は、この相對を脱して、絶對に觸れて來るでなければ宗教にはならぬ。然るに今日は、形こそ宗教と稱してゐるのであるけれども、ほとけ故拜むの信仰では、まるで物の遣り取りの信仰といふもので、さういふ信仰で居る故有難く受取れたとか、受取れぬとか、思つたとか思へぬとか。さういふことが問題になつて來るは、茲の處でまだ相對が破れて居ないからである。斯くの如き相對の立場から眞實の安心を得んとしても、それは逆も不可能のこととなつて來るのである。

七 原因は自分のかけてゐる眼鏡にある

すると今要の處になつて來たのであるが、矢張り私の經驗で言ふとよいと思ふ。茲が私の血涙を絞つた處故。
上來いふ如く初め私は眞實に生命捨て、遣つてゐると思つて居つたの故、その間は私は他から何と言はれても平氣であつた。處が最後にその如く仕てたと思つて居つたものが、皆な名譽心の所爲であつたと分つて來たら、自分がいけなかつたことは分つて來たが、そのいけ無いのを何うするか。『だから善く仕なくては』

滅を見るであらうに。それを此方が「自分が悪いのだ」と、控へる一種の五分々々を以て向ふから、いつまでも問題は止まぬのであるが、人が何と思はうと、「分りました」と、斯くそれを氣にせぬ無我の心で向へるやうになりたしたら、どんなによからう」と、斯く思ふやうになつたと言つたら皆様が分つて下さるだらうと思ふ。

こは小にしては家庭の問題より、大は外交上の問題に至るまでが、皆な斯く互に我慢張り、あゝ斯うやるから收らぬのであるが——

處が茲に氣をつけ可きは、私が初めのは人相手にあゝ斯う思つて居つたのである。處が最後に斯く『自分が我慢が止まぬのがいかぬのだ、五分々々が止まぬのがいかぬのだ』となつたは、最早や人相手の話で無い。自分自身の問題となつて來たのである。こは一體信仰問題の分りにくいのは、人を勘定に入れるから分りにくい。設へば『自分とて人に五分々々仕度くはなけれども、如何せん人がやるから此方もやる。此方は疾うから止めたのだけども』の話なら、問題は人に行き自分は仕度くないのだけれども、人が悪いの問題とな

つて来る。處が茲が『斯く人を悪い』といつ迄も人を隔て、悪しざまに見る心が自分に止まぬ故』となる。悪いは自分の方に來り、自分が悪いの問題となつて来る。成る程それは横から見たらば、兩方が悪いの問題であらうけれど、信仰問題は自分自身の問題の解決故、自分の方さへみればよい。『イヤそれは五分々々故、先方も悪いが前も悪い。兩方が悪いの故兩方が控へて』の仲裁は、それは妥協といふものである。彌々眞に自分一人が安心を得る爲めには、人は何うあらうが、自分さへ我慢を思はぬやうになりさへすればよいの故——茲は非常に肝要な處で、一體我々が『人が悪い』と人が悪しく見えるのは、人が悪しく見える眼鏡を掛けて居るからである。人が色々に見える眼鏡を我々はかけて居る。即ちその眼鏡さへ脱してしまへば、世の中が悪しく見えなくなつてしまふわけである。そのことは現に御同やうが人と争ひすることは、境遇を變へやうが、相手が變へらうが同じである。甲と一緒だつた時は争ひが絶えなかつたも、乙となつたら争ひが爲くなつたと、然ういくならまことに結構であるけれども、甲にいけなかつた

者には乙にもいかぬ。『私は行く先き』で苦勞が多くて困ります』などいふも、行く先き』で五分々々が待ち受けて居るのか。否な此方が持つて廻はりて行く先き』で出すから先方からも出されると、斯ういふ風になつてゐるのである。故に原因は此方の心に在る。そこへ問題を持つて來なくてはいかぬのである。處が茲が皆様の言はれる時、大低が中ぐらゐらなりである。『私も悪いと思ひます』と一度は仰しやるも、『併し人もひどいと思ひます』と、大低が茲中ぐらゐらなりである。

そこは私に於ては何うなりて居るかといふに、私が初めは『宗教の爲に』と言ひ、二度目には『人がいかぬ』となり、三度目には『自分の隔て心が止まぬの』がいかぬのだ』と、之が矢張り何程相手は變はらうが、私の五分々々根性は何處までいつても同じことになつて出て居るのである。即ちそこは何程境遇は變らうが、相手は變はらうが、私とその根性のある限り、この世を畢へ次生まで行かうが、同じことである。私にこの性分のある限り、何處迄行つても變らぬとなつてゐるのである。即ち佛教に於てはこの世は流轉輪廻といふ

ことをいふ。斯の何處まで行つても同じであることを言うてあるのである。そこで斯く私は最後に『この五分五分さへ止まり、無我になることさへ出来たらば』と、茲まで思ふやうになつたといふ、茲は枉げても聞いて置いて欲しいのである。

八 絶對自力

と申して私はそれが出来たとは一言も申して居らぬ。處が茲を半聞きする人は、私が『さういふ風になれ』と言つたといふ風に聞き取つて居らるゝ方が幾らもある。私はそんなこと一言も教へて居らぬ。私が然うさへ出来ればよいことまでは思ふたも、終にそれが出来無つたといふ經驗を披瀝して居るのである。また入らざることを言ひ出すも——

基督教の方の苦まるゝは、茲で苦しんで居らるゝが多いのである。基督教ではその敵を愛せよと教えて、敵の爲め祈れとまでいふの故、同教の人は何ちらかといへば、優しい方の人が多く、人を悪しく思はぬやうに骨折つて居る人が多いのである。處がその結果は何うなるかといふに、同教の人が自分は基督教徒故人によく出来、敵を愛することが出来て居ると思つてゐる人

は、同教でも淺慕な方の人である。若しその敵を愛するを、本統に理想的に行はんとすれば、言葉にはいくらも言へるも、心からは本統になしにくい。第一人を敵と見る時に、もうその人を愛しては居らぬのである。愛するならば人が敵と見える可き道理がない。人を敵視して居るといふことが既に第一の矛盾である。況んやそれに對して高い立場に立ち、愛してやらうなど、臨むは、二重の間違ひを重ねて居るものである。故に同教でも眞地目な人は、言葉には何うても言へるも、心には冷かなものであることを氣づいて居る人が多い。こは佛教でも然うであつて、眞宗では俗諦門をいふ。念佛して以上は人に善くならねばならぬに、心がその如くならぬで濟まぬ』と、之に苦しんで居る人が少くないのである。即ち先きの方の如きも之になる。そこでその出来ぬは善くしなくてはならぬし、處が私が飽く迄無我て人を敵視せず遣り通せば立派なことであつたのである。温くせんとすればする程彌々自分の冷きに氣づき、我慢張らぬやうにすればする程、益々自分の我慢を發見すると、斯うなつて行つたのである。即

ち上來、折角^ままで問題^を押し詰めて来て、『私が無我になれ』ば、『悪しく思はぬやうに出來れば』如何に人が隔て冷く向はうと、その隔てるが氣の毒と、何處迄もそれに取り合はず、飽く迄^ま過^ぎり通^することが出來れば』と——若し之が遣り果せば之は偉いことなのである。即ち之が自力である。眞宗の人は頭から自力を悪く思ふ癖があるも、自力決して悪いことと無^し、遣り遂げられれば是程よいことはないのである。即ち絶對自力である。何程人が冷く向はうと、その者に飽く迄^ま過^ぎり通^することが出來れば』と、終にその者が中心から和げられて仕まふまでその者に情け深く、一枚板の一點隔てを雜えぬ人、そ^ういふ人になれれば其人は絶對自力の人である。絶對自力とは絶對他方に對して用ゐて見たのであるが——處が實は禪宗自から自方だなど、は言はぬ。今日禪宗の人自らが自力などいふは變である。自力とは他方から貶しめて言うた處の言である。眞宗の者から『あれは自力ぢや』と、『我慢な人間ぢや』といふ程の意味にて言うた言葉にて、決してよい言葉では無い。爾るに今日は他方が尊まれず、自力が貶されず、變なこ^とになつて来て居るのであるが、斯く善くない意味に

て自力の言葉が起つて来て居るといふは、即ち今の如く遣り通せれば結構なことであるも、處がそれが出來ないことであるからである。即ち前來長いことかゝり茲まで持つて来て、彌々の肝要の處にて、それが出來ないことになつて来た。之が百のものが九十九までよくても、最後の一つがいかにぬとなれば、全部が皆な駄目になつて仕まふと申す處である。

そのことは具體的にいふならば、光明皇后が大佛殿を建て、全國の總國分寺となし、國々に國分寺を置き、頻に信仰的經營の事を致された。一夕内殿に聲ありて、斯く大佛像の建立も結構であるが、更に不幸なる世の病者の爲め、浴室を設けて浴を興へられれば大に佛意に叶ふとの意味の告げがあつたといふのである。こは國々の國分寺にはそれを設けて夫れ、に『金光明最勝王經』を置かれたのであるが、その御經の中には藥湯を以て病者を治療するとのことが書いてある。即ち如何程『御經』を尊崇するも、更にその中に説いてある事柄を、その如く實地にやり遂げればよからうといふのにて、實に廣大なる理想である。即ちそれ迄も悲田、施藥の二院を置きて、天下の貧者病者を救恤のこと

を致されたのであるが、更に癩病者一千を集めて風呂に入れ、自から親しく洗ひ取つてやらうとの誓ひを起されて、待女と共にその九百九十九人までを洗つてやられたと申すのである。處がその千人目に身體中が腐れ潰れてあるひどいのが来て、洗つて頂くのみでなく何うかこの膿汁を吸ひ取つて呉れといふ。流石の皇后も之には大に沮む色があつた。併し壹千人をとの誓ひ故、終に思ひ切つて吸ひ取つてやられたといふのである。是は最後のそれ一つせぬと、それまでの九百九十九人が何の爲めに仕たのだからぬ。打算的には九百九十九まで出來れば大體が出來たとするかも知れぬも、精神的にはそれ迄の全部が無意義となる。するとその病者が忽ち大光明を放ちて、阿閃佛の姿を現し、『我は實に阿閃佛である云々』といつて立ち去つたといふのである。即ち九百九十九人まで出來ても、最後の一つが出來なくては貫徹無い。思ひ切つた自力ばなしのやうであるも、他力の信仰でも或處にゆくとこの境地がある。近頃はやるマラン競争でも最後を取らなくては何もならぬ。戦争は最後の五分間に勝つ。處が私共の五分々々が斯くこの最後に至つて止まるかといふに

如何にしても止まらぬ、そこで残念ながち話はおと戻りである。之が自力では進もゆけぬといふ味ひである。近頃の他力を聞く人は、『自力ではいけぬ』というても、十に一つか二つは出來ることがある』そう思つて居る人がある。何も勞働することや、衣食することが出來ぬとでない。飽く迄人に善くし、立派な心になり切ることが出來ぬとである。出來ぬとなればあと戻りて、中には『いや自分は九百九十九まで、これまでよくやつたのに、それを人が見ぬといふは、人がいかぬ』といふ人があるも、なに九百九十九迄よくやつても、最後に一つ『人が見ぬのがいかにぬ』と不足が出たとしたら、それ迄の九百九十九が、人に善くしたと褒めて貰ふ爲めの道具にやつて居つたといふことになつて仕まふのである。故に佛敎に於ては曾無一善と説いてある。此頃は一日一善主義といふさへある世の中に、一つも無いとはひどいやうであるけれども、斯くして我々の爲すことに、一つとして本統の善いことは無い。罪惡といふことも畢竟このことを意味する言葉に外ならぬのである。

九 「性分を理解して呉るゝ者は

あるまいか」

さて以上言ふ如くて、我々のすることは善も悪も皆な相對五分々々である。五分々々のものは眞實のものでない故、我々の善悪は、善悪共に皆ないかぬ。——處て先きの方が『いけなかつた』と氣がついたら、『悪かつた』と一晚眠れずに、心が煮えくり反つたといはれる。それは茲の處の『いけなかつた』といふ氣づき丈けて、それが解決出來てないから故、そこを解決して來なくては何にもならぬ。即ち上來長く述べ來つたけれども、寧ろ之からの處が聞いて貰ひ處となるのである。

殊に眞宗の人は之からあとの部分を大低が聞きととして居る。考へても見られよ、子供が死んでこの世の當てにならぬとこ丈けは誰にも分る。私は罪惡觀から信仰に這入つたのであるも、無常觀よりすれば、善きも悪きも此の世が皆な當てにならぬとこ丈けは直ぐ分る。昨夜も久し振りで或方に會つたのであるが、先月の廿六日に子供を一人失うたと仰しやる。『自分のとこには七人の子供あつても今まで病氣せぬ。此の度び

たかといふに、

『自分は斯れ程止めやう／＼に苦心しても、如何にしても止まぬのであるが、自分がこれ程思つても、こゝ止められぬ處を誰か理解して呉れる者があればよからう』と。

併し茲は自分々々の性分て聞いて頂かねばならぬ。兎角私は疑ひ隔て深いのが性分て、之が私の生れつきである。故にこの疑ひ隔て深いのを人に持つて行けば、如何な優しき無我の人もこれには呆れて仕まうて、然らう／＼疑ひ深くては仕様がなといふに決つてある。すれば彌々自分は仕やうが無いばかりかしてあるが、併し學生時代故友人間などによく自分を理解して呉れる者がある。その如く眞實自分を理解して呉れる者ありて、『君がそれ程止めやう／＼に苦心して居ることは分つてゐるも、如何せん君のは性分故止まらぬのである。その止まらぬとこは僕にはよく分る故、如何にもそれをいかに／＼と言はるゝばかりかしては、全く以て君も仕やうがあるまい。僕は君の止まらぬのは、止まらぬのが無理ないところを理解したのであるからは、君が何程止まらぬが、止まらぬ丈けその止まぬのが彌々

疫痢で僅か一日ばかりの病氣で逝つて仕まうた。自分の家の子供は死なぬと思つて居たに」と仰しやる。『信仰の方は何うか』と聞くに、その方はもう自分では分つて居る積りて居られる。然う言ひながら涙をほろ／＼と、如何にも心がやり場なく、仕て見やうなげの有様で居られる。即ちその如く唯仕て見やうない丈けが信仰でない。然るに何故皆んなが茲の處で聞きとすかといふに、宗教は然うしたものとの軽い自分の丁解て心を蔽ふてゐるからである。即ち斯ういふのを見て下さるのが佛だとか何んとか、口では然うした言葉でいうるのであるけれども、それが何のことだか自分自身にさつぱり意味をなして居らぬ。——そこは私自身が斯く最後に『自分がこの隔てさへ、五分々々さへ無くなれば人も五分々々離れて來るの故、自分がこの隔てさへ止められれば、無我にさへなればよい』とされて大にやつたのであるけれども、終に最後に如何にして止められ無いか、すると其止められぬ私が茲で何うあれば救はれるか、問題を茲にして聞いて頂ければよいのである。私は斯く彌々自分が止められぬに行き詰つて、終に最後に何ういふ風に思ふやうになつ

氣の毒と思つてこそあれ、それだから君が悪いなどと、は微塵思はぬ』と、斯ういふて呉れる者が無いかとやつて來たのである。茲は何でもないやうであるけれども、今までの思想とは全然異つた處のものがある。今まで如何にしても五分々々から出られなかつたは、自分が我慢なれば我慢な者は人がいかにぬいふ。自分が疑へば人も必ず自分を疑つて來る。故に如何にしても自分が止める以外に安心の道なかつたは當然である。故に止め度い／＼に骨折つたのであるけれども、終に如何してもそれが止まらぬ。そこで今度は考の向きが更にコロリと轉回して來て、

『君、止めやう／＼と苦しまるゝのであるけれども、それは君の性分て止ま無いのであることはよく分る。君心配せず置き給へ。君が如何程我慢言はれやうと隔てられやうと——狂人が何程非常識仕やうとも、それは狂人なれば答む可きては無いでないか。現に『信卷』阿闍世王の處には書いてある。狂人が戒を犯さうと罪にはならぬ。持たうと思つても持つことが出來ぬの故。寧ろ狂人に當り前のことをせよと言ふ。言ふ者の方が無理である』と、斯く私が出來ないは、出來無い私の

性分であることを理解して、『性分なれば止まぬ筈、無理ない』と玆を見て呉れる者は有るまいかと、斯ういふことになつて來たのである。

一〇 日本全國みなへら聞きをしてゐる

處で玆で言ふ時に一つおちる處がある。人と人と五分々々て争ふを横から見て——人の家の五分々々を隣より見て、それを氣の毒と同情することはまだ仕易い。併し之でもよい處がある。私が人と五分々々やる、見る人屹度悪く思つてゐると思つて居る處に、『イヤそれの出て來るは無理ない』とそこを買つて貰へれば、此方としては言へる丈け言へる處が出て來る故、側面より言はれるのもよい。併しも一つ正面より、——狂人は誰れ彼れの見さがへなく、自分に相手になる程の者を皆な疑ひ隔て、かゝるのである。我々神經衰弱の時は道行く程の者が皆な變に見える。道歩いてゐる程の者が、皆な自分を悪く思つてゐるのでないかとやうに思へる。然うなると自分に同情して呉れる處の人にとて、此方は隔て、行くのである。

そこは信者の人の間には、『我々人に悪しくするのは人間同志故、佛さまは悪しくは思はぬ』と、斯う思ふとなつて來て、斯くして善し悪しの惱みが永劫に止まぬとなつてゐるのである。若し本統によく思ふのならば、善きにも悪しきにも一やうによく思ふのでなくては本統で無い。

そこで今の如く友人が、『君の五分々々は、それは性分て止まぬの故』と言つて呉れたとして、『然ういうて呉れるから有難い』と、直ぐそこで受けるのだと取ると、今のよい五分々々になつて仕まつていかぬのである。友人の方は何程親切に言を極めて優しくいうて呉れやうが、その爲め此方は我慢が止まるかといふに、止まらぬのである。止まらぬの故その同情して呉れる者に對しても、此方は我慢で向つて行くのである。そこは狂人なれば誰彼の差別は無い。狂人に喧嘩せなと止めにゆく者あれば、『何だ!』と手を振り上げてかゝるに決つてゐるのである。その時に『ウン、彼は五分々々の者故、あれの止まぬのは無理無い』と何處迄も我慢を離れて向つて呉れる處の人ならば、此方は斯く手を振り上げて向つて行くのを、『イヤあれは出る筈』と、それを何處までも悪しく思はず、それに眞實にして下さると、斯うなるのである。マア喧嘩の仲裁の場

てゐる人がある。ナニ之は人には悪い五分々々をやり、佛さまには優しい五分々々をやつてゐるといふものがある。人間同志には強い五分々々、佛さまには優しい五分々々と、それなら信仰にならぬ。極言すれば日本全國、これ程澤山の眞宗ありて、朝に晩に何かしら皆な聞いてゐるわけである、それが皆な残らずへら聞きをしてゐる。家にありては周圍と五分々々、佛に参りては有難い／＼と、それではいつ迄經ちても、何にもならぬ。大低が『家の内にゐてイヤな五分々々はもうイヤ故、寺へ参りてよい五分々々をやりませう』と、それ故いつ迄聞いても何にもならぬのである。玆は今少し深く、『家ではこの五分々々がやまぬ故、この五分々々心を寺へ持つて行き、寺で取り替へて來て、家に歸つて二度と五分々々が出ぬやうに仕ませう』と、そこ迄考へなくてはいかぬ。そこはこの會館へ來る人の間でも『會館で聞いている間はよけれど、家に歸れば變になります』は、之が同じことである。我々の五分々々心は、善き者に遇ひてはよく働き、悪しき者に向ひては悪しく働く、之が五分々々心の本質故、即ちよきに遇ひてはよくなる丈け、悪しきに對してはいかぬ

合に於て、喧嘩してゐる人間の方が『君、何うも有難う／＼』然ういうてくれている間は這入つた方の者もまことに遣りよいも、處が仲裁する者の方が一つ本氣にグン々々やり出すと、喧嘩してゐる奴の方も『君、いらぬお世話だ、退いて、呉れ給へ』必ずやり出すに決つてゐるのである。その時に眞實ある仲裁者なら、設し撲ぐられやうが打たれやうが、『それは君としてはそう來る筈なのだ。併し君がそれするからいつまでも君が苦勞が止まぬので無いか。もとより僕はそれを承知で來てゐるの故、君に撲られやうが打たれやうが、それを悪しくは更に思はぬも、それ丈け君の性分に就て心配する處あつて來てゐるの故、君も少しは考へて見て呉れたら何うか。』——即ち斯く今までは喧嘩するはいかぬ／＼とばかり言はれて居つた處に、『イヤ喧嘩の止まぬは無理がない。それが悪いとは露更思はぬ。併しそれ丈け僕としては見て上げずには置けぬでないか』斯うなつて來る處があるのである。

一一 悪しきを悪しく思はぬとなり

殊に私が言ひ度いは、『君の五分々々を更に悪しく思はぬ』之で私は言ひ度いのである。それは私が無我に

なり果せばよかつたのであるも、それに私がりなり切
れぬ。なれぬ私は誰れにも彼れにも五分々々て向ふの
であるも、それを更に悪しく思はぬとの人は、如何に
私とその五分々々て行かうが、——存らん限りの五分
々々て行かうが、それを更に斥けぬとの入である。即
ちそれまでに私の五分々々の止まぬ處を理解して、そ
れを更に斥けぬとの無我の恵みには、如何な喧嘩好き
の人間も自から心和我して、「何うも恐入りました」とな
るが、無我の仲裁者の爲に心和我して来る味ひである。
するとひと度び心和我と再び人相手に喧嘩せんとして
も出来ぬ、と斯うなつて来るのである。——我々の冷
かな氷の心は人につめたく當るばかりであるに、「その
つめたいは無理がない、性ぢやもの、それを悪く思ふ
ものか。腹が立つたら自分の頭を撲つて癒して呉れ！
如何程撲ぐらうがそこを理解したのなもの、それを悪
しく思ふものか」それ程の無我な人に出會へば如何な
我慢の私も、之には心融けて来るで無いか。心が融け
て仕まへば家に歸りて五分々々やらんとしても、遣る
可き力を失つて来るで無いかと、斯う申すのである。
そこは山伏辨圓が親鸞聖人に遇ひ奉つて、また／＼聖

人を要撃して弓の矢引かうとやらうとしても、聖人の
方が

上人左右なくいであひたまひけり。すなはち尊顔に
むかひたてまつるに、害心たちまち消滅して、あま
さへ後悔の涙禁しがたし。(御傳鈔)

先方が五分々々離れたお心て來られる故、如何な辨圓
も之には「恐入りました」となりて、

梓弓はりまの君もいさららに、
悔ゆる心に袖しぼりけり。

もう二度と弓引かうとしても引く譯けにゆかぬやうに
なつて来るのである。故に茲の處の肝腎は、私が如何
に五分々々て佛に刃向はらうも、それは無理ないと如何
なる私の刃向ひをも斥けざる佛の恵みにあひ奉れば、

ちと茲は言葉が強くなるも、私の方が五分々々を止
めるのは決して無いのですぞ！。私の方はやりても
／＼何處までもそれを受けざる廣大の恵みに遇ひ奉
れば、今度は反對にその恵みの爲に私の我慢の方が碎
かれて仕まつて、「恐入りました」と斯うなつて來るの
である。釋尊在世の時に外道が來て、頻に佛の悪口を

言うた。佛が相手にならぬ。言ふ丈け言はせて置い
て、「時に汝に人が物を贈つた時に、汝受けぬと何うな
るか」それは持つて歸るより仕やうがない」といふと
「それでは自分も受けぬから」と仰しやつたといふ話
がある。私の五分々々が止まぬを「無理がない、自分
は何とも思はぬ」と、それを更に悪しく思はず、受付
けて下さらぬ無我の眞實に出會ふと、初めて私の五分
々々の心が引くりかへつて「それは有難い」となる。
するとそれは佛丈けに心が折れたのでは無くて、私が
常に力入れて性をいうは茲である。それは斯く私の
五分々々の性がそのお慈悲に融けたの故、もう世の
中に如何に冷い氷があらうが雪が降らうが、私の心と
は無關係である。私の心の安心はそのお慈悲一つてさ
せて貰はれると、斯うなるのである。

けよけ切なからう。それは無理ないと思ふ故、それに同
情するのぞと、斯く我々の悪しきを悪しく思はざる悪
みの塊が佛の眞實となる。私共唯悪い丈けては悪しさ
の處置に困る。その悪しきを哀み悪しく思はざる無我
の同情が佛の慈悲と、斯ういふことになるのである。

一二 彌陀の法水をながせ

こは先きにも言ふた基督教の人の間には、自分が人
に優しく向はんとして、自分の心の冷さに氣がついた
時には、「この冷いのではないかぬ、もつと優しくならぬ
ば」と苦心して、いつまでもなれないに苦しんで居
る人がある。現に數年前大學を出て某校の教授を仕て
居る某氏は、以前この求道會に聞きに來ると同時に、
基督教の方も聞いて居た。寧ろ本領は基督教の方にあ
つたので同教の方をよけ聞いて居り、敵を愛し隣人に
親切に向はんとすればする程、自分の心の彌々冷かに
して、眞に親切になれないに苦しんで茲に來て聞かれ
たのであつた。或時私が講話の上で申したには、「我々
温かく人に向はねばならぬ故、そうされるやうにな
ることが佛教と思ひ易いのであるけれども、然うてな
い。反對に如何にならんとしなれぬ我々の心であ

るが、その心を佛の方より諒解して下されて、『嘸寒からう、冷からう。その冷いのは悪しく思はぬ、何處までも温めてやるぞ』と、之が佛のお慈悲であることを申したら、その時迄基督教になる積りでゐた處のその人が、『この冷かなのを哀み、之に呆れぬとの慈悲か』と、その時一聲思はず南無阿彌陀佛々々々、口に念佛が逆り出たのがその方の宗教上の態度が決つたものになつたことがある。世には佛敎でも基督敎でも眞髓は同じことなどいふ人があるも、斯く我々の悪しきに呆れぬが佛と聞くなり、南無阿彌陀佛々々々、それで斯くこの方の宗教上の態度が決つて動かぬ。――

話は別になるが此の間もこの方から手紙が来て言はれるには、『仙臺にゐた時は有難かつたも、此頃この地に來てから一向喜べぬ。仙臺にゐた時は子供が死んで死んで却て喜んだも、此の地に來てからは親に死なれ親が死の時自分が病氣仕てゐて、親の死に目にも遇へ無かつた。何とやら此頃は有難いも何もなくなりて、人見れば突つ掛つて行き度いやうな心持ちがある云々』と。――一寸をかしいやうであるけれども、之が一旦お慈悲で和いだのであるけれどもまた冷えて來たので

べし。細々に信心のみぞをさらへて、彌陀の法水をながせといへる事ありげに候。

とか。信心の貫ひ直しを幾度びもすることかと思ふた否、此方が信心も失せる奴故、細々に信心の溝をさらへて、彌陀の法水を流がせとのお言葉である。我々このお眞實に夜を明けさせて貰うた上からも、根が狂ひが性分の私なれば、折々煩惱の雲霧が懸り、我が身ながら信心も何うなつたかと思ふまでになることがある。處がそれだから遣り直しせんならぬのでなく、そうなることを佛かねて知召し、それが無理ないとそれに何處までも呆れて下さらぬものが彌陀の法水である。故にその彌陀の法水を通せとの仰せである。即ち斯く此方がいつ迄も寒ければこそ、その寒さが寒からんと、それに何處々々迄も呆れざる、それがお慈悲の温きであることを、よく頂かなくはならぬのである。

一三 此方が左衛門、辨圓となり、お慈悲の方が聖人となる

先きには聖人が山伏辨圓に對せられたで申したのであるが、聖人の御傳には斯く人生問題に響きのある出來事が多い。之などにしても聖人の御事蹟を聞いて、

ある。即ち我々、初めてこのお眞實を知らされた時には嬉しきも、冷えると亦之が起つて來る。即ちこれがもとの狂ひの性なのである。然らばそれが頂けて居無いかといふに、否、それまで頂いてゐても然ういふ心が起つて來る、その起るが無理ないと、その淺間しきを何處迄も惠みて下さるお慈悲の温きにあへば、その者が有難いと、斯うなつて來るのである。こは信後の告白としてこれ程に言はれたも少いと思ふた故申したのであるが――

こは皆様に於かれても『斯れ程長い間信心聞いてもこんな心が起つて來る』と思はれるがあるか知れぬなれども、いつまで聞いてもそんな心が起つて來る、その御同やう故、その止まぬが哀れのお惠みなれば、『いつまで聞いてもこんな心が起る』ととるでない、起る御同やう故いつまでも聞かなくてはならぬのである。蓮如上人の『御文』には、

彌陀如來の眞實信心をば、いくたびも他力よりさづけらるゝ處の佛智の不思議なりとこゝろをえて云々、とか、又

さりながらそのまゝうちすて候へば、信心もうせ候

聖人がよく周圍の者に優しくせられたと取りたらいがぬのである。それは結果から見れば優しくなされたになるも、それは先方からは引引いて刃向ふも、それに此方よりは優しくと、それで優しくなされたので無い。辨圓の方は引引いて刃向ふも、聖人の方はその刃向ふは無理ないと、そこを御覽になつたから、如何程刃向ふもそれを聖人の方は悪しく思召なんだと、之が聖人の上にお慈悲が現はれたと申すものである。マア辨圓の話を始め聖人のなされたことは、佛のお慈悲の方に頂くことが出来る。即ち私共の方は辨圓になりて、――聖人に丈けて無く誰にでも五分々々て刃向つて行くが私共の辨圓である。それで刃向ふをその刃向ふは最もと、それに五分々々を離れて向つて下されたが親鸞聖人である。即ち私共五分々々の辨圓は、その五分々々離れた聖人の同情に遇ひ奉りてこそ、その奴が害心忽ち消滅すると、斯うなつて來るのである。

日野左衛門の話の方は正史に無い。併し昔より傳説として言ひ傳へられてゐることと、近頃は新しき劇にまでなつて來た。之などにしても日野左衛門の如き刃向ひに、それに呆れ給はなかつた理解、同情の親鸞聖

人と頂くと、私の方は左衛門になりて、頂くことが出来る。私など監獄に關係ある處から、折々出獄人が訪ねて来る。私の所に泊れともいへぬから早く國に歸れといふ。歸へれと言はれたとて旅費が無い。さればとて家に入れてやる譯けには行かず、然ういふ時には全く自分が左衛門をしてる氣持ちすることがある。然うなると餘り左衛門の悪口も言へぬ。知らぬ坊さんが泊めて呉れと言ふて来たとして、泊めぬかも知れず、大に五分々々やるかも知れぬのである。故に私は聖人を自分の方に頂く方には言はぬ。それは聖人として雪の中に泊り場所もなく、寒くもあつたらうし、冷くもあられたらう。がそれは然ういふ冷い自分である。その冷いにつけその冷いを了解し、哀み、お見捨て無い恵みが有難いとなるのである。て聖人は左衛門が如何にひどくしやうが、その雪の中でこの恵み一つを喜ばれたと成るのであるが、併し茲て兎角聖人が斯く五分々々離れて左衛門に向はれた、我々もその眞似をするのだと之になり易い。之になる時は人が左衛門、辨圓で、自分の方が親鸞聖人と、之になる時はいかぬのである。寧ろ聖人とても人が無情にする時は、人が冷いと自分

の心までが冷くなる。イヤその時に自分の心さへ温ければ、如何程人が冷く仕やうが温かく居れる筈と、處がそのことが得いかぬのである。その冷い、心淋しいを眞に同情せらるゝ方のお心は、『如何にも汝その爲に冷いであらう、愚痴が出るだらう、人見れば突つ掛り度くなるだらう、——』我々機嫌の悪い時に一方の人には突つ掛り、一方の人に優しくと、その心の使ひ分けは出来るもので無い。我々の心の使ひ分けはあれは本統て無いのである。あれは善く來る人には善く向ひ悪しく來る者には悪しく行くと、この五分々々心の表れに外ならぬ。故に『——自分が冷いとすればその心の愚痴は、それは汝に出る筈である。人が恨めしく思ふ心の起つて來るも、それは起るに更に無理が無い。その起るを此方は何處々々までも悪しく思はぬのぞ』と、斯く私の冷き、心淋しき、そこを飽くまでも御覽下さるが佛の慈悲であるといふ、茲を聞かなくては何もならぬのである。——

私共聖人の教を讀みて、いつも心に響く御文は、聖人のつねのおほせには、彌陀の五劫思惟の願をよ／＼案すれば、親鸞一人がためなりけり。さればそ

くばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。(歎異)

之が聖人の言葉に表はれたるお領解の、最も骨目であらうと思はせて貰ふのである。『聖人の常の仰せ』とあるからは、聖人は常にこのお言葉を口癖の如く仰しやつたものに違ひ無い。又『行卷』には『正信念佛偈』を作りて、あなた御自身の信仰の啓白をなさらうとして先づ仰せられたには

夫れ菩薩の佛に歸する、孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸して、動靜已に非ず、出沒必ず由あるが如し。恩を知つて徳を報ず、理宜しく先づ啓すべし。即ち孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸して、動靜出沒已れに非る如く、その如く佛のみ前に親鸞自身の心中を申のふると、お述べになつた處の『正信偈』である。故に『正信偈』はあなたの御告白に違ひない。それが眞つ最初から

無量壽如來に歸命し、不可思議光に南無したてまつる。法藏菩薩因位の時、世自在王佛の所に在て、諸佛淨土の因、國土人天の善惡を親見して、無上殊勝

の願を建立し、希有の大弘誓を起發せり。五劫に之を思惟し攝受したまふ。重ねて誓ふらば名聲十方に聞えん。云々。

之が筆初めのお言葉になつてゐるのである。抑々この法藏菩薩の五劫思惟といふことが、之が何かといふに之を我々の上に引き當て、いふならば、——

一四 五劫永劫のお眞實には如何な我々も腹ふくれ

私が最後に如何にしても隔てが止められず、自分が捨てられず、哀れこの止められぬ性分を見て呉るゝ者ありて、我はその善く出來ないを理解したの故、汝は出來ぬはいかぬと悲むも、我はその出來ぬを悪しく思はぬのぞ、その出來ぬ處を氣の毒と同情するのぞと、斯く見て呉るゝ友人は無いかと之に私は苦んだのであつた。即ち法藏菩薩の五劫思惟なることは、斯く私が座禪が出來ず觀念が出來ず、斯く何一つとして私がこのよく出來ないを見て下されたといふことが、この五劫思惟といふことなのである。即ち私が長い問答に苦んで、然ういふ見て呉れ手は無いか／＼と悶えに悶え苦んで、終に最後にそれに氣がついたといふは、この

法藏菩薩の五劫思惟なることが、斯の私が如何にしてもよく爲せぬ、茲をかねて見て下された御親切であつたことに氣づかして貰つたといふわけだつたのである。

更に一步進んで、『その愚癡、貪欲が止まぬを見たからは、止まぬが氣の毒と見たの故、その者に此方からは如何程でも愚癡を離れ、欲を離れて向ふぞ』とのことは、之が永劫の修行といふことになる。——マア前來成る可く通俗的に、人間同志の言葉に換へて言ふたのであるけれども、それは茲に少し表はし難い處がある。即ち見て下されると言ひても、唯『見てやるぞ』の言葉丈けては茲少し分り難い。欲の深い止まぬと見たからは、——いかぬといひても止むもので無いとこれを了解したからは、いかぬと言はずにその者に此方よりは、何處までも欲を離れて見てやるぞと、斯く飽く迄も欲を離れて下された、無貪の御眞實であることを聞かなくては、いかぬのである。即ち此欲の私の爲には如何程でも欲を離れるぞとの慈悲の爲には、先方が無欲の人故に此方が欲を離れるのでは無い。此方は欲の奴故如何程でも欲やるも、そのやるに何處

までも呆れないとの慈悲には、その奴が自から腹よくるゝ處が出て來るでないかと申すのである。此方は如何程でも腹立てるも、『その立つは無理ない』とそこを理解したのであるからは、それを此方は氣に碍へるでない、それを悪く思はぬのぞ』と、それに腹立てずに、こやかにして下さる慈悲なれば、その思召にはその奴が有難いと頂けるでないかと申すのである。即ち之が永劫の修行といふことである。マア我々、五劫の思惟とか永劫の修行とか、如何にも著しいことのやうに思ふのであるけれども、何ぞ知らん、現に斯く私がこの何處々々までも疑ひ、隔ての止まざる者。故に聖人の常の仰せには、『彌陀の五劫思惟の願をよくく案すれば、親鸞一人がためなりけり。』——現に斯れ程疑ひ、腹立ちの止まぬのを見て、その止まぬは無理ないとの五劫思惟の慈悲により、『その冷い汝を何處までも哀み見てやるぞ』——一分一厘私の冷きを斥けずに、その爲にその者に飽く迄欲を離れ、瞋を離れて向うで下さる思召には、即ち聖人が日野左工門の門前に、それ程雪の中に無情に扱はれながら、彌々この冷きにつけてもこの慈悲一つが有難いと、即ち南無阿彌陀佛

々々々と、一夜を雪の中に、こやかに過させて貰はれたとなるのである。同やうに私共の仕やうのない處を、それ程までに見て下された五劫思惟の御眞實には、如何な不足の私共も、初めて飽き足り、得心させて貰はれるわけである。殊に日野左工門の例を持ち出したは、何程慈悲が頂けた處が、外界にある雪が消えて仕まつわけてない。如何に外界に雪は有らうが、その爲に冷い丈けを温める慈悲の懷に入らせて貰へば、雪の中に在りながらその冷い丈けが融かされて仕まつてないかと申すのである。この冷い丈けが哀はれむ慈悲に融かされて仕まつ、その現はれを言ふと、こは果して聖人が言はれたか何うか、眞偽の程は怪しいも、その時聖人が仰せられたといふ歌に、

さむくとも袂に入れよ西の風
彌陀の國よりふくと思へば。

『寒くとも』故即ち寒いのである。寒いもその寒いを哀れむ同情の眞實の温きに接すれば、その眞實一つで安らかに在らせて貰へるでないかとなるのである。

一五 絶對の救ひの有様

以上は大分長たらしく申したのであるが、以上申し

た處の中心は吾が身自身、我々自身といふ處にある。そこを大低が皆な聞きおとす。そこを『人が』と人に思ひ易い。佛が哀みて下さるといふことを、何か慈悲の日光の爲に、春が來た如くに物が外界から融けて來てもするが如くに思ひ易いのであるけれども然うて無い。風雪の中に我々が冷くて仕やうがないのを哀んで下さるとである。茲は非常に大切な處で、現に私が斯くお話するに際しても、動もすれば私が『皆様分りましたか』といふ言葉が出る。すると『分りました』とハッキリ答へられる程に頂けてある方はよけれども、それ程ハッキリしてゐない方は、『すると自分の分りて居ないのかぬのか』となる。ナニその如く分ら無いのを悪く思はぬとの心なのである。それを『分るのだ』とそれに聞いて居る間は、即ちそれが自力に聞いて居るといふものである。マア彌々の處が何れの道よりも、手も足も出ぬ處の愚かな自分となり果て、その自分故いかぬのかといふに、それに何處迄も呆れないといふことであり、我々の分ら無いのに、それに何處までも呆れないとの事である。いつかも或方が何れ丈け長い間茲に聞きに來て居ても、如何にし

ても慈悲が頂けぬ。仕舞ひにはこれ丈け聞いても分らぬとすれば、如何な先生も自分には呆れなさるだらうと、私に隠れて後部から聞きに来て居られた。それ程頂けぬのに苦心して居られた或方があつたのであつた。私氣がついたから或時の講話で、『此の中に自分が頂けぬ爲め私に氣兼ねして、成る可く穩れて聞いて居度い。然ういふ心持ちの方もあつたらしいが以ての外である。分つて居るなら何も聞きに来なくともよい。分らぬから分らぬ人に聞いて貰はうといふの故、分らぬければ分らぬ丈け猶ほ以て何れ程でも聞かさうといふのが、如來矜哀の御意趣である』その心であることを話したら、その人『自分のやうな分らぬ者は呆れられる』と思うて居た處に、『その者故に何處までも聞かさう、そつといふ心であつたとは有難い』と、初めて大に安心された方があつた。『それなら之から大に聞かして貰はう』そうなるのかといふに否、その者にさう向うて下さる、それがもう慈悲なのである。故にその者がこの心で接する、直にそれがもう有難いとなる。こは色々斯ういふ場合はありて、要するに熱心な方程自分が頂けぬのに骨折られる。それが結局思惑通

りに頂けて安心なされた方は一人も無い。頂けぬのを哀れむ慈悲に腹充たさせて貰ふが、一番肝腎となつて来るのである。即ち色々にいふたが、『絶対の慈悲』の味ひは茲になつて来るのである。

殊に最後に言ひ度いは、先きにいふ我々が相對の心で、『自分のやうな冷い、愚かな根性ではいかぬ』となつた時に、慈悲の方は何うあるのかといふに、『その分らぬ、冷いを哀はれに思ふの故、それが如何に悪しくともそれを悪く思はぬのぞ』と、この廣大な絶対の哀みの御眞實であることを申し度いのである。先きいふ如くこの界は何處までも相對の世界で、この世の義理といはうが人情といはうが、乃至政治、實業、教育、我々の生活残らずがこの五分々々のからみ合ひて、何處まで行つても解決がつかぬ。斯くして隔てが止まず、争ひが止まず、然るを『そのやまぬのはいかぬ』の相對では、彌々以て浮びやうが無いが、然るに『斯くの如くして何處までも止みやうの無いのが哀れ、その止まぬを悪く思はぬのぞ、それに何處までも呆れぬのぞ』この絶対の慈悲に遇ひてこそ、有りである。その私の相對が融かされ、放たれて初めて茲に救ひを

蒙ることを得る。之が絶対の救ひの有様であると、之

が申し度い眼目となつて来るのである。(巳七)

解脱と常樂

『眞佛土卷講話』三、四

近角常觀

第一 講 (前號に續く)

一〇 無愛無疑

そこで前の『涅槃經』文に歸りて、『眞解脱とは不生不滅なり云云』——こは『涅槃經』如來性品に眞解脱の味ひが、種々なる方面より言葉を盡くして説かせられてある。それを茲に一つ持つて來てお示し下されたのである。『和讃』には、

無上は眞解脱、
眞解脱は如來なり、
眞解脱は如來なり、
無愛無疑とはあらはるゝ。
眞解脱は如來なり』は、即ち先きいふ、彌々生命終つた時には、廣大な佛の境界に救はれて、盡十方無碍

の光明の眞佛と一味とならせて頂く慈悲なれば、眞解脱は即ち如來境である。殊に眞解脱の眞の字は、成る程我々廣大な恵みを知らされた一念に、その廣大な眞實でこの世に在りながら解脱は獲させて頂くのである。——如何にもそれはその一念に、我々解脱を得て迷ひの根切れはさせて頂くのであるも、而もこの世に肉身の存する限りは、何處までも有漏の穢身は變はらぬの故、未だ眞解脱とは言ふことは出来ぬ。釋尊が八十年間、如何に自在に化を施して下されたと言ひても、矢張り肉身を現じてゐて下された間は、矢張り眞

解脱とは言はれぬのである。彌々色身は滅して法身常住の世界にお還りになつた時が眞解脱である。我々も生命終つた處で、即ちそれをば證らせて貰ふとである。『……不生不滅不老不死不破不壞にして云々。』その眞解脱の境に於ては死ぬるも生きるも、破れるも壞れるも無い。この故に『如來入大涅槃と曰ふ』と、斯のやうに『涅槃經』にはお説きになつてあるとである。

次には

『乃至又解脱とは無上上に名く。乃至無上上は即ち眞解脱なり。眞解脱は即ち是れ如來なり。』

無上上は、この上の無い上であつて、即ち絶對界の境涯のことである。

『乃至 若し阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得己つて無愛無疑なり。無愛無疑は即ち眞解脱なり。眞解脱は即ち是れ如來なり。』

無愛無疑は之は珍らしい言である。『愛』は恩愛の愛、『疑』は『うたがふ』にて、即ち愛の反對、人を疑ひ嫌ふことである。即ち普通では無愛無疑は人情に冷い方で、悪い方に思うてゐることであるも、處が我々の苦むは實は愛疑の二心で苦む。故に『教行信證』信卷では『樂

邦文類』の後序の文を引かれて、樂邦文類の後序に曰く。淨土を修する者常に多けれども、其の門を得て徑に造る者幾くも無し。淨土を論ずる者常に多けれども、直に指ふる者或は寡し。曾つて未だ聞かず、自彰自蔽を以て説を爲すこと有る者。得るに因つて以て之を言ふ。夫れ自彰は愛に若くは莫し。自蔽は疑に若くは莫し。但疑愛の二心をして、了に彰礙無らしむるは、則ち淨土の一門なり。未だ始めて間隔せず、彌陀の洪願常に自から攝持したまふこと必然の理也。

即ち自障は愛に若くは無く、自蔽は疑ひに若くは無く、即ち愛、疑の二心を持ちて、常に互に自彰自蔽して居るが我々の迷ひの現狀であるが、——
即ちそのことは常にいふ、人が善いとか悪いとか、隔てるとか、疑ふとか、先方に隔てがとれて打ち融けられればよいとは誰しも望む處であるも、それが如何にしても打ち解けられぬで苦しむのが我々の愛疑の性分であるが、然るにその性分を哀れ給ふ處のお慈悲なるが故に、その隔てる私に對して、それを更に隔て給はず、何處々々までも五分々々離れた惠みて向つて下さる廣

大のお眞實に遇ひ奉るのであるが故に、如何な隔ての私も、終にこの廣大のお眞實の前には、その愛疑の二心を消され、融かされて仕まふ處が他方のうま味である。即ち今ある無愛無疑は、このお眞實に出あつた一念に、それを我々が經驗せしめられ、味はしめられる法益であるけれども、何分本來隔ての性分の奴故、その限り無きお慈悲と頂いて居つても、矢張り此方はそのあとからまたく隔てが首出して來るのである。即ち私共この世にある限りは、廣大のお慈悲に夜を明けさせて貰うた一念、煩惱惡業の根は切らせて貰うて居つても、矢張りそのあとから『あ、斯う』の思ひは起り、

色々の惱みも現はれて來るのである。併し何程現はれるは現はれても、現はれる限りを哀れむお慈悲の爲に、その現はれる限りを哀れむお慈悲の爲に、斷ち切られて仕舞ふ、茲が他方の眼目であつて、この點は呉れく動かしてはなぬのであるが、然しその根切ればさせて頂いてからも、矢張り肉身の在る間は、根無し草に花咲く如く、矢張りまた諸の愛疑が現はれて來る。即ち眞の無愛無疑が顯現して來るは、この世の生命を畢り、眞解脱を得、即ち『阿耨多羅三藐

三菩提を成ずることを得己りて、無愛無疑なり』と、斯うなるのである。

一一 『如來は即ち是れ涅槃なり』等
次に

『如來は即ち是れ涅槃なり。涅槃は即ち是れ無盡なり。無盡は即ち是れ佛性なり。佛性は即ち是れ決定なり。決定は即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり。』
無盡も、佛性も、決定も、涅槃の異名に外ならぬ。

『迦葉菩薩佛に白して言はく、世尊若涅槃と佛性と決定と如來と、是れ一義の名ならば、云何して説いて三歸依有るやと言まへるや。佛迦葉に告はく、善男子一切衆生生死を怖畏するが故に三歸を求む。三歸を以ての故に、則ち佛性と決定と涅槃とを知るなり。』
茲はちと言うて見るならば、『涅槃經』の本文には、一切衆生、生死、諸の煩惱を怖畏するが故に、故に三歸を受く。譬へば群鹿は獵師を怖畏して既に免難を得る如く、若し一跳を得るときは則ち一歸に喩ふ。是の如く三跳するときは三歸に喩ふ。三跳を以ての故に安樂を得、云云。

とあつて、群鹿が獵師を怖畏するが故に免難を得る如

く、衆生が南無佛、南無法、南無僧と、三歸を求むることを得るも、生死、諸の煩惱の苦を怖畏するが故だと言はれてあるのである。するとこの三歸は佛にすがりつく三歸とされるのであるけれども、之は譬へて言うてあるのであつて、我々の方は生死を怖畏すると言うても、それは唯怖れ畏るゝのみにて、歸すべき方角さへも分らぬ處の我々の暗黒なのである。然るに思ひがけなく佛の方よりその者に、お見捨てなき大悲の眞實を加えらるゝにより、その思召が徹した時には、其の者が三歸を起さざるをえぬと、斯うなつて來るのである。するとその『三歸を以ての故に、則ち佛性と決定と涅槃とを知るなり』と、斯ういふことになるのである。

『善男子、法の名一義異なる有り。法の名義俱異なる有り。名一義異とは、佛と常法と常比丘僧とは常なり。涅槃、虚空皆な亦是れ常なり。是を名一義異と名く。』

讀む可きであるも、斯く茲には『佛と、常法と(この時は世の常でなき、眞の常の意味)常比丘僧とは常なり』と讀ませられてあるのである。又涅槃、虚空も皆また是れ常である。斯くの如く義は色々に別れて居つても、要するに名は皆な是れ『常』であるのが名一義異である。また

『名義俱異とは、佛を名けて覺と爲す。法を不覺と名く。僧を和合と名く。涅槃を解脱と名く。虚空を非善と名く。亦無碍と名く。是を名義俱異と爲す。善男子、三歸依とは亦復是の如しと。略也』

之は名も義も俱に異つたのとは、佛を名けて覺とする上よりいふ時は、法は然ういふ覺などいふことを離れたものである故に、不覺と名ける。僧は和合と名け、涅槃は解脱と名け、虚空は非善と名け、亦無碍と名ける。斯くの如く名も義も俱に異つてあるのが、之が名義俱異であると、斯ういふ風に説かれてあるのである。

畢竟皆な是れ廣大なる眞證の境界の味ひなれば、連も我々の思慮にも言葉にも届かぬ處の事どもである。

善男子、法に名は一つて義は異つたのがあるし、名も義も俱に異つたのがある。名は一つて義が異つたのとは、『佛と常法と常比丘僧とは常なり』とは、之は普通には『佛は常なり、法は常なり、比丘僧は常なり』と

又次には
『又言はく、光明は不羸劣に名く。不羸劣とは名けて

如來と曰ふ。又光明は名けて智慧と爲すと。已上』
この光明は如何に障り多からんが、如何に苦み多からんが、何處々々までもその者を救ふ、即ち永久變ることなき、羸劣(をとりふ)あること無き光明なれば、即ち光明は不羸劣に名ける。不羸劣は即ち如來である、斯ういふ處のち示してある。又『光明は名けて智慧と爲す』——即ち光明は智慧の相である。即ち先きの『一念多念證文』に『この如來は光明なり。光明は智慧なり。智慧はひかりのかたちなり。智慧またかたちなれば、不可思議光佛とまうすなり。……』とやうに、段々開展して來る處である。要するに以上、斯くの如

く段々法性法身の廣大なる證の境界の有様をば述べ上げて、即ちその境界はそれより全面に光を放ち、他く迄も我々を救ふ不羸劣の大光明を放ちて、不可思議光佛が顯はれ現はれ出て下されたる處の境界である。そしてその光明に照らされ、救ひ上げられた處の味ひが、即ち歸依佛、歸依法、歸依僧の三歸となる。それはその儘茲に淨土眞宗となつて、我々がこの光明に遇ひ奉つた一念に、その廣大な境界に生れさせられ可き身とせしめらるゝと、斯ういふことになるのである。
こゝらて一つ切りに致さうと思ふ(已上)

第 二 講

一 『涅槃經』五味の譬喩

『又言はく、善男子一切有爲は皆な是れ無常なり。虚空は無爲なり、是の故に常と爲す。佛性は無爲なり、是の故に常と爲す。虚空は即ち是れ佛性なり。佛性

は即ち是れ如來なり。如來は即ち是れ無爲なり。無爲は即ち是れ常なり。常は即ち是れ法なり。法は即ち是れ僧なり。僧は即ち無爲なり。無爲は即ち是れ常なり。』

前講來拜讀する、聖人が『涅槃經』の肝腎な處を抜き出して、示し下された處の文である。段々拜讀するに、同經全體に涉りて、抜き出して置いてになる。即ち先きの『如來性品』の文であつたが、之よりの『聖行品』の文である。去りながら、廣く全體から、抜き出すと言ひても、聖人のはその、抜き方が、要らざる所は皆な取り去つて、要と思はれる處丈け舉げて置いて下さるの故、この御本書に引いてある處丈けを拜讀すれば、我々としては充分といふわけである。そこで茲の文であるが、

『善男子一切有爲は皆な是れ無常なり』この世の色々變化あるものが有爲である。肉體を始め、一切有爲は皆な是れ無常である。處が虚空は無爲であるから、この故に常住とする。『佛性は無爲なり、是の故に常と爲す』は、佛の廣大なる證の境界は無爲である、故に常である。『虚空は即ち是れ佛性なり』は、聖人の『淨土文類聚鈔』の中には、

慈悲深遠、虚空の如く、智慧圓滿、巨海の如し。といふ言葉がある。虚空の飽くまでも虚しく、何物をも碍ふることなきが、涅槃の廣大な境界味であるが、

善男子是の如くの義の故に、説いて如來所有の功德無量無邊不可稱計と言へり。抄出

『牛より乳を出す、乳より酪を出す』は、酪は何か牛乳よりこしらへたるものゝやうで、印度西藏などに行く人は、然らういふ種類の喰べ物を見ることがあるやうである。その『酪より更に生蘇を出す』生蘇は何か斯う、酔い味ひを持つたものだやうで、その生蘇が更に熟したものが、次ぎの熟蘇である。その熟蘇より更に醍醐を出す。この醍醐となれば之がもう味の最上品で服することある者は、衆病悉く皆な治癒する。故に外の有らゆる藥は皆なその中に含まつて仕まふといふわけである。善男子、佛も亦是の如く『佛より十二部經を出す』——十二部經といふのは因縁、譬喩、本起、本生等、佛の説法の様式に十二通りがある。即ち佛説法の、然らういふそれのの様式の經説をいうたもので、何も別に然らういふ經名の御經があるわけではない。その『十二部經より修多羅を出す』は、修多羅は契經といふて、然らういふそれのの様式にて個々になつてあつたものがまとまつて、段々筋道立つた御經が出来て來たのが修多羅である。それより方等經を出すは、方等は諸

その虚しきはそれにお慈悲の充ち満てる虚しきであるが故に、『慈悲深遠、虚空の如く』である。次にその佛性は即ち如來であつて、如來は即ち無爲であり、無爲は即ち常である。次に『常は即ち是れ法なり。法は即ち是れ僧なり云云』とあつて、法と言はんが僧と言はんが、皆な茲は廣大なる法性界の境界味のことなれば皆な是れ常である、と、七づこんな具合にあるのである。さて次からが有名なる『涅槃經』の五味の譬喩の文にて、天臺などにては之によつて所謂五時の教判を立て、喧しいことに言うてゐる文である。先づ本文から讀んで行くと

『乃至善男子、譬へば牛より乳を出す。乳より酪を出す。酪より生蘇を出す。生蘇より熟蘇を出す。熟蘇より醍醐を出す。醍醐最上なり。若し服すること有る者は、衆病皆な除くる。所有の諸の藥は悉く其中に入るが如し。善男子佛も亦是の如し。佛より十二部經を出す。十二部經より修多羅を出す。修多羅より方等經を出す。方等經より般若波羅密を出す。般若波羅密より大涅槃を出す。猶し醍醐の如し。醍醐と言ふは佛性に喩ふ。佛性は即ち是れ如來なり。』

佛の淨土の有様などそれの如くに説いてある、その種類の經が方等經である。それより般若波羅密を出すは般若が智慧で、『大般若』六百卷に御存知の如く佛陀の智慧が説いてある。この『大般若』がそれである。最後にそれより大涅槃を出すは、大涅槃は即ち前來拜讀し來れる『涅槃經』及び『法華經』がそれであつて、この大涅槃となると、『猶し醍醐の如し』である。醍醐といふは佛性に喩ふ。佛性は即ち如來であつて、『善男子、是の如きの義の故に、如來所有の功德、無量無邊不可稱計と言へり』——斯くの如きの義理なるが故に、涅槃佛性の醍醐味となると、甚深無盡の味ひであると、マアこんな風にあるのである。

二 天臺の五時の教判について

處で茲には言ふ要も無いのであるけれども、天臺宗に於ては之によりて、所謂五時の教判を立てる。即ち佛の説法を五時に分けて、先づ第一の華嚴時には、佛は『華嚴經』の説法をなされた。之は初めて廣大なる、佛自證の華嚴の境界を説かれたのであるけれども、何分日輪出て、初めて三界を照らした如く、餘りに廣大な味ひであつて、弟子達には分らなかつた。こゝに於て

先づ漸次に衆生を導くやうに、卑近な處から説いてゆかれたのが第二の阿含時の『阿含經』の説法である。それから次に段々諸佛の世界等を説いて來られたのが、第三の方等時の諸經で、そのあとで『大般若』六百卷に智慧を説かれたのが、第四の般若時である。そして彌れを説かれた彌々最後に『法華經』『涅槃經』を説き、彌々取つて措きの最後の涅槃の醍醐味を示された。之が第五の涅槃時と、斯ういふ具合に之を五時と言つて、天臺宗では喧ましき佛教の分類になつて居るのである。一面より見れば、即ち一代佛教を、漸次に然ういふ順序で説いて行かれたといふ見方になつて居るのである。處が要らざることを言ふやうなれども、徳川時代に富永仲基なる人があつて、『出定笑語』なる本を書き、この人は一切經を非常によく讀まれた人で、その本に於て天臺宗のこの解釋を笑ひ、之は然ういふ順序で段々説いて行かれたといふことでは無くして、寧ろ然ういふ順序で發達して行つたといふ、佛教の歴史的發達を示したものである。即ち個々に散在して居つた十二部經から、進んで契經の經典が出來、更に發達して行等、般若、涅槃と、斯くその上と精髓が進展して行

つた、發達の階次を語つたものと、斯ういふことを言つて居るのである。之は一面甚だ剴切な點もあつて、この仲基なる人が初めて佛教の本文批評を評みた、之が元祖だといふ人もある程なのである。何れにせよ茲の處は非常に意味深い處であつて——殊に親鸞聖人がこの『涅槃經』を、斯く縦横に引用し、お出でになる、その御遣り口は決して天臺の五時八教などに、少しでも束られておいてになると思へぬのである。そこになると、今日の言葉でいへば、達意的と言はんか、要領を攫み出したと言はんか、『涅槃經』ぶつづけに貴方の信仰眼で、その一番樞要を引き抜いて來てお示し下されてあるのであつて、従つて之を頂くにも本文直接に之を頂いた方が、却て味ひ深いと思ふのである。

三 涅槃醍醐味とは何ぞ

そこで先き言ふ十二部經は、或は前生の因縁を持つて來て説かれたり、或は諸の譬喩を持つて來て説かれたり、斯くの如く佛のお説きになつたのを様式によりて分類すると、十二通りになる。即ち十二通りの様式によりてそれ／＼説かれたものが十二部經であるが、

即ちそれから段々集つて、次ぎの契經の修多羅の經文が出來たのであるが、更にその上より諸佛の教えは斯う／＼である、諸佛の境界はあゝ斯うであると、それを盛に説き宣べ給ふたのが、次ぎの方等經である。さて斯く諸佛の教法はそれ／＼廣大にして極りないが、それを捲いて盡むといふと結局の處佛の廣大なる智慧の外に無い。そこで次ぎの『大般若』六百卷には四諦、十二因縁、有りとあるもの、皆なこの智慧であると、佛の智慧を説かれたものがこの『大般若』である。之は私なども、初めは御經は、結局一つことばかりが説いてある。殊に『大般若』の如き、御承知の如く、空を説くとなれば、イヤ茲に在る本も空である、コツブも空である。水も空である、机も空である、といふ具合に何もかも皆な空であるとかし説いてある。又清淨を説くとなれば、あれも清淨である、是も清淨であるといふ具合に、何も彼も皆な清淨であるとかし説いてある。斯ういふ風にあるのは何うかと思つたのであるが、之は段々頂いて來るに、即ち斯ういふ風に説いて來て、即ち『大般若』一卷でもを拜讀すれば、成程何もかも皆な空であると、心にのづから然う

體得出来るやうに、然うなされてゐるのである。

之は全體印度のものは皆な斯うなので、御承知の如く『阿彌陀經』の六方段の如きにしても、東西南北四維上下、皆な一々にあゝいふ風に叮嚀に在るのは、分らぬやうな氣もするのであるけれども、あゝいふ風にあらにもこちらにも、諸佛が各廣長の舌相を出して、徧く三千大千世界を覆うて證誠護念して下さると、夫れが斯く何邊も／＼繰返してあるから、讀むと成る程然ういふ廣大な諸佛の證誠護念であるかと、それが知らせて貰はれるのである。昔支那の或人は佛教はいつても同じことばかり繰返してゐる。——例えば『大經』の七寶段の如きにしても、何々を本とし、何々を莖とし、何々を枝とし、何々を條とし、といふ具合に餘りに叮嚀に一つことばかりが言つてある。マア今の『阿彌陀經』の如きにしても、東方世界なら東方世界を一つ言つたら、あとの南西北上下も亦復斯くの如しとやつたら、それでよさそうなのであるに、佛教のものは文章が咄いと言つた人がある。處が實は斯く繰返す處に佛教のものは値打ちがある。皆さまにしてもマア第一南無阿彌陀佛は繰返して稱えられる。斯く繰返して言ふ處

に味ひがあるのである。毎朝々々繰返して同じ處を頂
く處に値打ちがある。故に私の講話などにしても、い
つも同じことばかり繰返して申し上げて居る。兎
に角斯く繰返して仰しやつて下されてあるから、おの
づから拜讀の間に、御真意が體得させて頂けるのが有
難いと思ふ。

そこで斯く有らゆる事柄に就き、一つことを繰返し
／＼お説き下さつてあるが『大般若』六百卷の智慧の説
法であるが、その智慧の結局は最後の涅槃味の外に無
い。茲に於てか次ぎの『涅槃經』、『法華經』の説法がある
と、斯ういふ具合になるのである。そしてそれをば牛
より乳を出し、乳より酪を出し、次第に生蘇、熟蘇を
經て、最後の醍醐味が現はれて來ると、この五味に喩え
て仰しやつてあるのであるが、之は實に適切なる譬で
ある。即ち牛より現はれた牛乳が次第に精製され、
最後に純粹なる牛乳の旨いとこばかし塊つたのが最後
の醍醐味であると、斯ういふ意味の譬喩である。即ち
佛がお説きになつた十二部經より契經となり、方等、
般若が出來上つて、終にその最後に佛説の生粹ばかり
が塊り現はれて來たのが涅槃の醍醐味である。そして

その涅槃醍醐味といふは、即ち本願一實の、純粹に南
無阿彌陀佛の慈悲ばかりのお眞實であると、斯うい
ふことになるのであつて、これは如何にも徹底したる御
教示である。

四 親鸞聖人と『法華經』

猶ほ言ひかけたから言ふのであるが、古來茲に今一
つ問題があつて、それは聖人が『教行信證』中に、『法華
經』が一個所も引かれて無いは何ういふ譯けかといふ
この問題である。之は設えば、勅語となれば何人もが
襟を正すが如く、聖人の時代に在つては天台といへば
當時の全教界の權威である。そしてその天台は『法華
經』がもととなつてゐる。即ち當代この上もなく權威
ある『法華經』であるのに、それを避けたものか、嫌つた
ものか、聖人は一言半句も御引用なされて居無い。今
日日蓮ばやりの世の中でも、これ程『法華經』を喧しく
いふのに、『教行信證』中にそれが一言も仰しやつてな
いといふは、何ういふものだらう。或はそういふ權威
ある『法華經』故、態と御遠慮なされたもので無からう
か。態と憚つて、『法華』を言ふのを控へられたもので
あらう、といふ説もあるのである。處が之はまた裏か

ら言ふと、その如く時代の人が餘りに『法華』を振り廻
はず故、聖人は面白く思はれなから、態と引かれ
無かつたところに考へられぬでも無い。

處が私が思ふに、之はその何らでも無い。聖人の
頭には避けるも嫌ふも、もと／＼本願醍醐の妙薬一つ
を説くにあるの故、その事が『法華經』に在らうも無か
らうも、そんなことは頭から素通りしてもた具合にあ
るのだと思ふ。全體御承知の如く、天台宗では、『法華』
も『涅槃』も同時の教として、一つになりて居るの故、
『法華經』を避けるなら同時に『涅槃經』も避けてよい筈
である。また言葉の上から言ひても『諸經和讃』の

久遠實成阿彌陀佛、五濁の凡愚をあはれみ
釋迦牟尼佛としめしてぞ、迦耶城には應現する。
この文など『法華』の壽量品が原となつて、檀那院の覺
運和尚が言はれた言葉に基いて、お作りになつてゐる
の故、何も『法華』だから、天台だから、お用ゐになら
ぬといふ譯けて無い。殊には『教行信證』の卷末には、
傳教大師の『末法灯明記』の文を長々と引用して、『現世
利益讃』には、

山家の傳教大師は、國土人民をあはれみて、

七難消滅の誦文には、南無阿彌陀佛をとまふべし。
斯く名前迄擧げて仰せられてあるの故、何も天台だか
ら特に御遠慮なされたといふわけでも無い。要するに
聖人の頭には、天台であらうが華嚴であらうが、涅槃で
あらうが法華であらうが、この一南無阿彌陀佛を説く
の外に無い。この涅槃醍醐の妙薬たる本願南無阿彌陀
佛これ一つを頂く之を外にして佛の出世本懷は無い
と、之が聖人の大根本であつて、そしてそれを斯く『涅
槃經』五味の譬喩を引いてお示しになつて居る位故、聖
人にすれば何も避けたも嫌つたも、そんなことはてん
て聖人には、頭から問題になつて居なかつたことと思
ふ。故に表には如何にも『法華經』は引いてなければ、
當時の一般の思想には、この時代『法華經』の思想は入
り充ちて居つたの故、おのづからそれが聖人の上にも
表はれて、例せば『大經讚』の上などにも、

彌陀成佛のこのかたは、いまに十劫とときたれど
塵點久遠劫よりも、ひさしき佛とみへたまふ。
これなど『法華經』から出てゐるお言葉なのである。一
般に考へて居る程、御使用になつてない譯けては無い。
故に之は避けたの嫌うたの、然ういふ拘はつたことで

は無くして、唯何ういふものか觸れ無つたといふまで
にある。

昔、梁の恵王は孟子に會つて道を尋ねたといふこと
がある。又莊子も恵王に行つて道を話したといふこと
がある。處が『孟子』にも莊子のことが一言書いてなく、
『莊子』にも孟子のことが一言書いて居ない。即ち何う
いふものか互に觸れないで通つて仕まつてゐるのであ
る。また日本でも道元禪師は聖人の時代に盛に禪宗を
興された人である。聖人より後に生れて、六十にして
先きに往かれた。而も血統を調べると從兄弟の間であ
るとの説もある。それも手近かの深草に道元禪師が居
られて、それが書かれた物見ても、互に觸れ合つた處が
更に無い、全く擦れ違ひに通つて仕まつて居られるの
である。即ち之が避けたの、除けたのと、そんな意志の
加はつたことと無く、聖人にすれば南無阿彌陀佛の廣
大な恵み一つを言ふ外に、何も言はんならぬことが無
くなつて仕まつた結果が、斯ういふことになつて現は
れて來たのである。即ち茲に示されてある醍醐味とい
ふ味ひも、然ういふ味ひであらうと思はせて貰ふので
ある。己上は御經ばなしが大分多くなつて仕まつた。

斯く南無阿彌陀佛の一つに茲の醍醐味を持つて來る
味ひも、之は經文に何うあるから、斯うあるからとい
ふので無く、全く佛教の眞髓を聖人が直き／＼頂かれ
た、その信仰眼から讀みになつたものであることを
忘れてはならぬのである。

五 『慧眼無きが故に見ること能はず』

次に移りて、
『又言はく、善男子、道に二種有り。一には常、二に
は無常なり。……』
之からは『涅槃經』梵行品の文である。道に二種ありて
一には常の永久變化なき道と、二には無常の變化ある
道となる。

『……菩薩の相に亦二種有り。一には常、二には無常
なり。涅槃も亦爾なり。外道の道を名けて無常と爲
す。内道の道は之を名けて常と爲す。……』
外道の道は即ち佛教の眞味以外の道であつて、内道の
道は佛教眞實の道である。
『……聲聞、緣覺所有の菩提を名けて無常と爲す。菩
薩、諸佛の所有の菩提、之を名けて常と爲す。……』
聲聞、緣覺は自利のみありて利他の無い、即ち未だ眞

實味に到達し無い、過程にある證位なれば、その所有
の菩提は常で無い。之に對して菩薩諸佛所有の菩提は
即ち眞實證の所有なれば、皆な是れ常である。
『……外の解脱は名けて無常と爲す。内の解脱は之を
名けて常と爲す。……』

印度では様々なる教がありて、皆なそれ／＼に解脱を
説く。即ち佛説以外のそれら外道に言ふ處の解脱が、
外の解脱である。之に對して佛の示された、眞實證の
解脱が内の解脱である。
『……善男子、道と菩提及び涅槃と、悉く名けて常
と爲す。……』
斯く、道と菩提と、及び涅槃と、悉く之を名けて常と
爲す。

『……一切衆生は常に無量の煩惱の爲に覆はれて慧眼
無きが故に、見ることを得ること能はず。……』
これ實にこの『眞佛土卷』の要をなす、卷末に在るとこ
ろの御自釋の文、

爾れば如來の眞説、宗師の釋義、明に知ぬ安養淨刹
は眞の報土なることを顯はす。惑染の衆生此にして
性を見ること能はず、煩惱に覆はるゝが故に。

この文の出所であつて、我々はこの界に於て廣大なる
境界に往くことが出來ず、眞の佛性を見ることが出來
ぬ。佛に救はれてその界に參らせて貰うた時、初めて
了々分明に見ることが出来る。故に一切衆生は煩惱に
覆はるゝが故に見ることが出來ぬ。

『……而して諸の衆生、戒定慧を修むるを見むと欲ふ
が爲に、修行を以ての故に、菩提と及び涅槃とを見
る。是を菩薩得道菩提涅槃と名く。……』
茲は『涅槃經』の本文では『諸の衆生、見んと欲ふが爲
に戒定慧を修め、修行を以ての故に云云』と讀んであ
る。戒、定、慧の三學は即ち佛道修行の根底であつて、
『戒定慧を修るを見んと欲ふが故に』は、即ち我々が
佛の戒定慧を頂くにとるがよい。佛の廣大な戒定慧を
頂くが故に、佛の恵みによりて、我々が菩提と涅槃と
を見させて頂くことが出来る。是を菩薩得道菩提涅槃
と名ける。

『……道の性相、實に不生滅なり。是の義を以ての故
に投持す可らず。』
斯くの如く道の性相は實に不生滅、眞の常住そのも
のであるが故に、——『投持す可からず』は『涅槃經』

ては『捉持す可らず』になつてある。即ち我々が何う斯う把握することが出来ぬ意味であらうと思ふ。

『乃至道は色像無しと雖、見つ可きこと、稱量して知ぬ可し。而も實に用有り。』

斯くの如く涅槃の廣大なる境界は、不生不滅、非有非無、色、形を超絶した境界である。而も『見つ可きこと、稱量して知ぬ可し』。『稱量して知ぬ可し』は證を経た上で量り知ることが出来るとであらう。而も實に用あり』は、斯く人間の思議を絶した廣大な境界である。而もそれが絶大なる用があるのである。

『乃至衆生の心の如きは、是れ色に非ず、長に非ず、短に非ず、庵に非ず、細に非ず、縛に非ず、解に非ず、見に非ずと雖、法として亦是れ有なりと。抄出』

即ち我々衆生の心の如きは、色像、長短、細麤、縛解、然ういふ色、形て言ふことが出来ぬ、所謂長短方圓の形を絶した状態にある。而も亦是れ法として有である。即ち茲は廣大なる涅槃味の上より、我々衆生の心の上に佛性を言ふのであつて、我々の心の上に、直ちに然ういふ形を具へた佛性が有るとは言へぬ。併し一切の衆生が、大慈大悲を得可きが故に佛性が有

と仰せられてある。

また入らざることを言ふやゝになるも、全體この常樂、我、淨なる文字は、『常』は常住の永久に變はらぬことであり、『樂』はたのしみ、『我』はわれ、『淨』はさよらかで、こは今日青年の人の頭には、何人も永久變らぬ常を欲し、樂を求め、また頻に自我を言ひ立て、淨は理想のよらかなるを欲すると、總て斯くの如く常、樂、我、淨を求むるが今日の時代精神であると言つてよい。處が余りに時代の人心に背きたことを言ひ出すやうであるも、自分が、自國がといふ、余りに各自がこの我を言ひ立てた結果が、世界が我と我の大衝突となつて、先年來の大戦争を惹起し、余りに常、常と、いつまでも變らぬ國を打ち建てやうと、それに行き過ぎた結果が獨逸、露西亞の倒壊となりて、即ち之等は常に常、樂、我、淨を欲して、實際としては終に得られなかつた有様である。故に佛教に於ては斯くの如くこの世界に於て、いつまでも樂えて行けるものがあらうと思ふのが逆だ、といふことを言うて、即ちこの界に於て斯くの如き常、樂、我、淨があらうと考へるのを、凡夫の四顛倒と名けて居るのである。之は曇

るといふ、即ち我々が慈悲頂くことが出来ると、いふ上より言ふ時は、即ち佛性は我々の心に有である、とやうの意味になるのである。

六 涅槃の四徳、凡夫の四顛倒

さて之から先きの一段は、『涅槃經』徳王品の文であつて、これ迄の處は、廣大な涅槃味の『常』の方に就いて書いてあつたのであるが、之から先きの處は涅槃味の『樂』(たのしみ)の方に就いて書いてあるのである。即ち常樂の、この度びは樂の方の側となるのである。之はこの次ぎには、更に『純淨を以ての故に大涅槃と名く』以下の御文があつて、純淨は純粹なる淨である。即ち一口にいへば、總て茲の一聯は、涅槃の常、樂、我、淨に就いて書いてあると頂けばよい。この常樂の味ひに就いては『和讃』には、

煩惱具足と信知して、
すなはち穢身すてはてし、
本願力に乗ずれば、
法性常樂證せしむ。

とのお示しがあり、又『正信偈』には、
行者正しく金剛心を受けしめ、慶喜一念相應の後、
韋提と等しく三忍を獲、即ち法性の常樂を證せしむ
といへり。

總大師の言葉にも

顛倒の善果、能く梵行を壞す。
とあつて、世の中が斯く思ふやうになることがあらうと考へるのは、佛教の味ひには無いことになるのである。處で、斯く世の中が常て無い反對は無常となり、樂でない反對は苦となり、所謂、苦、空、無常、無我が現實世界の真相となるのであるが、即ちその有様を説き示されたのが釋尊の説法となるのである。即ち今日世間では、否、古來人間の存した限り、人間の求めた處は、この人間の常、樂、我、淨を求めるのであるが、何程求めた處が元來この界は、初めからそんなものが、存すること無き、苦、空、無常、無私の人生であるところが釋尊の説かれた様となるのである。併しながら、斯く當てにならぬ、仕方無い人生と、消極的にそれのみ言うのが佛教で無い。如何にも事實當てにならぬ、苦、空、無常、無私の人生であるが、その當てにならぬを哀み、この無常の世の中に、何處迄もその者を見捨て無き、救ひの大悲が塊り現はれて下されたが光、壽無量の眞佛の姿である。我々は轉變極り無き何處までも頼み無き、心細き有様であるも、その心細

七 『大樂有るが故に大涅槃と名く』

い限りその者を何處々々までも捨てぬ法性常樂の恵みが現はれて、この度びはその姿が眞實の常樂、我、淨となるのである。故にこの度びはこの意味からは之が涅槃の四徳といふことになつて来る。即ち常樂、我、淨なる言葉が、我々が人生的に思ふやうすることに來る時は、それは人間の迷妄になつて、一々に反對の意味となり、獨逸が彼の如く頻にやつたけれども、結局それが碎けて仕まつた。如何に物質的に基礎を固めることに努めた處がそれは結局滅びるものであつて、永久を期し難い。然らばそれは永遠の滅亡であつて、その苦、その悩みを救ふもの無きかといふに、否、その仕方なき有様であることを哀み、その仕方が無い丈け捨て掛けぬの光、壽無量の眞實の救ひがその者に顯現し、その者が物質上の樂みならぬ、佛常住の樂みの世界に救はるゝ。それが法性常樂の境界と斯ういふことになるのである。故にその境の味ひを知らず爲に、斯くは茲に『常』を説き、またこの度びは『樂』が來ると、斯ういふ具合にあるのだらうと思ふ。も一つ言へば樂は極樂の樂ととり、淨は淨土の淨と、斯ういふ風に茲を頂けば一番解りが早いと思ふ。

文を讀むことにして、

『又曰はく、善男子、大樂有るが故に大涅槃と名く。涅槃は無樂なり。』

全體斯ういふ風に樂しいとか、斯ういふ風に喜ばしいとか、然うした形の有る樂みが眞の樂みてない。そこへゆくと涅槃の樂は無樂の樂である。『……四樂を以ての故に、大涅槃と名く。何等をか四と爲る。一には諸樂を斷ずるが故に。樂を斷せざるは即ち名けて苦と爲す。若し苦有れば大樂と名けず。樂を斷ずるを以ての故に、則ち苦有ること無し』

涅槃の樂の味ひに四つがある。一には諸樂を斷ずるが故に』にて、諸の有形の樂みを斷ずるから樂である。有形の樂みを離れぬのは猶ほ苦の有様で、苦ある時には大樂と名けぬ。相對樂を斷ずるから、涅槃には苦が有ること無い。

『……無苦無樂乃ち大樂と名く。涅槃の性は無苦無樂なり。是の故に涅槃を名けて大樂と爲す。是の義を以ての故に大涅槃と名く。』

無苦無樂の眞の大樂であるが故に、その境を大涅槃と名けるとしてある。『復次に善男子、樂に二種有り。一には凡夫、二には諸佛なり。凡夫の樂は無常敗壞なり。是の故に無樂なり。諸佛は常樂なり。變易有ること無きが故に大樂と名く。』

即ち凡夫のは無常の敗壞するものであるが故に無樂とする。諸佛のは常樂にして、變易有ること無いが故に、大樂とするのである。

『復次に善男子、三種の受有り。……』
受は感覺ともいふ可き程のことである。

この故に大樂と名ける。大樂の故に大涅槃とあるとである。

八 『純淨を以ての故に大涅槃と名く』

次ぎからは先きいふ『淨』を一段となりて、
『又言はく、不可稱量不可思議なるが故に、名けて大涅槃と爲すことを得。』

即ち稱量す可らず、思議す可らざる廣大なる境界であるが故に、大涅槃とある。

『純淨を以ての故に大涅槃と名く。云何か純淨なる。淨に四種有り。何等をか四と爲る。一には二十五有、名けて不淨と爲す。能く永く斷ずるが故に、名けて淨と爲すことを得。淨は即ち涅槃なり。……』

純淨は純粹なる淨である。この純淨の故に大涅槃と名ける。この純淨にも亦四種あつて、一には二十五有——二十五有は我々迷ひの境界である。この迷ひの境界の不淨を永く離れたるが故に淨である。淨は即ち涅槃とある。

『……是の如きの涅槃、亦有にして是れ涅槃と名くることを得。實に是れ有に非ず。諸佛如來世俗に隨ふが故に、涅槃有なりと説きたまへり。……』

茲は『涅槃經』の本文では『是の如き涅槃、亦有と名くることを得。而も是れ涅槃は實に是れ有に非ず』と讀んである。即ち是の如き涅槃亦是れ有と名けることが出来るけれども、その有は我々二十五有界にいふ如き有ては無い。即ち能く皆様が『そんな廣大な境界が有るのですか。佛は本統に有るのですか』とくこの有る無いの問題に引つかゝられる。『有る』と答へて具合が悪く、無いと答へて具合が悪い。即ちその有る無いは、有るも無いも今燃えてる火を此方の身體におつ付けられれば『熱つゝ』

『……一には苦受、二には樂受、三には不苦不樂受なり。不苦不樂は是れ亦苦と爲す。涅槃も不苦不樂と同じと雖、然るに大樂と名く。大樂を以ての故に大涅槃と名く。』

受に三通りあつて、苦と樂と不苦不樂とである。不苦不樂の苦みも無く樂みも無きは、この世の當り前より言へば是れ苦である。併し涅槃の不苦不樂は全然別質の、正反對のものであつて、之は眞の大樂であるとしてある。

さて茲で先き四樂が有るとあつたを、その一つを區切りつけ、次に、
『二には大寂靜の故に、名けて大樂と爲す。……』

大寂靜は寂に靜かな大安靜である。

『……涅槃の性は是れ大寂靜なり。何を以ての故に、一切憍闍の法を遠離せるが故に。大寂を以ての故に大涅槃と名く。』

涅槃の性は一切憍闍の、虚偽の騒々しき煩惱を全然離脱した境界であるが故に、眞に是れ大寂靜境である。

『三には一切智の故に、名けて大樂と爲す。一切智に非るなば大樂と名けず。諸佛如來は一切智の故に、名けて大樂と爲す。大樂を以ての故に大涅槃と名く。』

一切智は即ち一切の智慧である。即ち眞實の智慧そのものである。諸佛如來は即ち眞實の智慧の塊りであるが故に、名けて大樂とする。

『四には身不壞の故に、名けて大樂と爲す。……』
佛の境には身體の壞る可きが無い。永劫の常住である。

『……身若し壞る可きは則ち樂と名けず。如來の身は金剛にして壞無し。煩惱の身、無常の身に非ず。故に大樂と名く。大樂を以ての故に大涅槃と名く。已上』
即ち如來の身は金剛の身にして、我々迷界の煩惱の身、無常の身で無い。

「一」と一邊に解決してしまふ如く、涅槃も有るといふた處が、その有るは我々が言ふ如き有るで無い。それを有るといはるればこの世で有るといふ、其處に物の有る如きに考へて、有る無いに拘はつてしまふから可かぬのである。故に

「……譬へば世人の、父に非るを父と言ひ、母に非るを母と言ふ。實に父母に非ずして、父母と言ふが如し。涅槃も亦爾なり。世俗に隨ふが故に、説て諸佛、有にして大涅槃なりと言へり。」

然るに諸佛が有ると説かれたのは、世間でも父母に非る叔父さん伯母さんな、父母の呼び名で通すことある如く、涅槃も有るといふた處が、この世の有るては無けれども、目醒めた廣大な境界に登らせて貰へば、自づからそこに現はれて来るの故、假に世俗に隨つて、有ると説かれたのである。之は二十五有を離れた境界なら、有はをかしいでないかと、これが起つて来るに對して、之を云はれたのである。

「二には業清淨の故に。一切凡夫の業は不清淨の故に、涅槃無し。諸佛如來は業清淨の故に、大淨と名く。大淨を以ての故に、大涅槃と名く。」

二には業清淨の故に、大淨と名ける。大淨の故に大涅槃と名ける。一切凡夫は業不清淨の故に、身若し無常なるを、則ち不淨と名く。如來の身は常なるが故に、大淨と名く。大淨を以ての故に大涅槃と名く。」

三には身清淨なるが故に。如來の身は常なるが故に淨である。四には心清淨の故に。心若し有漏なるを不淨と曰ふ。佛心は無漏なるが故に、大淨と名く。大淨を以ての故に大涅槃と名く。善男子、是を善男子善女人と名くと。抄出

有漏は煩惱の有ることである。如來の心は無漏なるが故に大淨である。大淨の故に大涅槃と名ける。是を善男子善女人と名くとである。次に移りて

「又言はく、善男子、諸佛如來は煩惱起らず、是を涅槃と名く。……」如來は余く煩惱から超脱した、眞解脱の境界である。故に之を涅槃と名ける。

「……所有る智慧、法に於て無碍なり。是を如來と爲す……」所有る智慧の境界であつて、如何なる法に於ても碍えられないといふことが無い。即ち我々の如何なる有碍を以てしても、碍えることの出来ぬ眞實の智慧が如來である。

「……如來は是れ凡夫、聲聞、緣覺、菩薩に非ず。是れを佛性と名く……」

即ち然ういふ二乘、三乘の境界で無いから、佛性である。……如來は心身、智慧、無量無邊何億億の土に徧滿したまふ。障碍する所無し。是を虚空と名く。……

如來は心身智慧、十方法界、如何なる國土にも行き涉り、充ち満ちて、如何なる國土にも障碍あることが無い。即ち十方微塵世界の隅々、迄も入り充ちて、我々を救うて下される有礙である。故に之を虚空と名ける。……如來は常住にして、變易有ること無しとは、名けて實相と曰ふ。

如來は常住にして、變易有ること無く、永劫に救ひの眞實であるとのこと、が、實相とのことである。……是の故を以ての故に、如來は實に畢竟して涅槃したまはず、是を菩薩と名くと。已上

即ち斯くの如く、如來は涅槃をお取りになつたと説くと雖、實はその如來は無量阿僧祇の世界に徧滿して、永劫常住の光として、常に救ひを垂れて居て下さるの故、實は畢竟して涅槃をとり給ふたもので無い。『是を菩薩と名く』とは、『涅槃經』の本文では『是を菩薩、大涅槃微妙の經典を修して、第七の功德を具足し成就すと名く』と、斯のやうに説いてあるのである。マア何にしても我等が頂く廣大な如來の妙境をお知らせ下されたものと思ふ。マア本席はこの邊に止めて、あとは次第に講席を追うて申上げやうと思ふ。(已上)

第十二回夏季求道會

七月二十三日より同三十日迄八日間

每朝八時より
毎夕七時より

講 話
信 仰 談 話 會
本郷區森川町一番地
求 道 會 館

講 題
一、親鸞聖人「教行信證」化身土卷

二、人生問題、信仰問題

講 師
近 角 常 觀

右に依り例年の如く本年も夏季求道會開催可致候間求道の諸君は奮つて御來會奉希望候也

(來 聽 隨 意)
求 道 會 館

求道學舎改築趣意書

求道學舎は我等が信仰の搖籃なり。如何なる不可思議の宿縁にや、創立已來既に滿二十年の齡を重ねたり。過ぎ來し方を顧みれば、はや涙ぐまること多かりき。其事業たる其名の示すが如く、眞面目に信仰を求むる學生の爲に設けられたる寄宿舎にして、其側ら講話を公開し、信仰坐談を爲して、四方求道の望に應じたりき。而して七年已前大方淨財の喜捨を仰ぎ、既に求道會館の落成を告げ、幸に現時信仰純熟の機縁に應ずることを得て、確に其事業の一半を満足することを得たりと雖、其一半たる寄宿舎の方面は空しく取殘されて、家屋益朽敗を極め、風餐雨蝕、柱傾き壁破れ、殆んど人の住居に堪へず、今や一刻の猶豫を許さざるに至れり。而して此搖籃より巢立ちたる出身者は、今や社會各部に位置を占め、各自信仰的立脚地より、何れも精神的貢獻を爲さざるはなし。經營者自身として何等人の爲に盡したりといふ自覺を有せず、唯朝夕佛を禮し、起臥信を語りたるに過ぎすと雖、佛天の冥加空しからず、一たび學舎の門に入れるの人は容易に出づるを欲せず、而して社會に立つに及びて、益々在舎の當時を思慕し、一たび播かれたる佛種は、必ず機縁の純熟を促して、終に同一鹹味の信海に朝宗せざるはなし。是に於てや歳久うして、初めて求道の寄宿舎の意義甚深なるを自信するこ

とを得たり。今や思想問題の波濤は世界を震撼して、人生活の根本を脅かし、眞摯なる學生何れも解決の歸趣に惑はざるはなし。此時に膺りて求道學舎を擴張して、時勢の要求に應じ、多年の實驗に鑒みて、理想の經營を實現し、以て信仰生活の標的たらしめんと欲す。是洵に思想解決の鍵鑰にして、社會改善の捷徑たらずんばならず。是を以て數年來我出身者及び同情者諸君より、學舎の改築を促さるゝこと切にして、遂に私に決せざるべからざる最後に迫れり。而して時恰も篤志厚情の方ありて、建築費一部の寄附を申出でらるゝに遇へり。乃ち之を以て學舎改築の礎石を置かれたる一着手とし、茲に設計を請ひ、豫算を作り、つゝしみて大方の喜捨を仰ぎて、會館と相待ち、永久に傳ふべき堅牢不燃の學舎を建立して、我が同朋が信仰の搖籃として、四海兄弟の實を擧げんこと、至願に堪へざるなり。切に請ふ同憂同情同信の諸彦、我志を成さしめ給へ。

大正十年十一月三十日

近角常觀敬白

坪數 貳百六十壹坪
豫算 八萬七千五百圓

書新大二の本讀仰信的驗體

意譯歎異鈔

大谷光演上人題字(歎異鈔第二章の一節)附録床掛用畫仙紙半折寫真平版印行
近角常觀先生・多田鼎先生序跋

四六版るびつき
洋裝 天金 美本
正價 壹圓五拾錢
郵税 拾錢
(版四第)

岡山高 池山榮吉 先生授
池山榮吉先生授

さきに亡き母のために『意譯歎異鈔』を公にして尊き救ひの書の上に光を見出し祖聖の御魂に活きたる著者はさらに自らの生の記念として絶対他力の體驗を日常生活の上にはひ其信念の告白を述べ、苦惱より救済へ信仰より相續へ獲信の徑路より信後の光明生活の新生に入れるまでの感想を披瀝す、一語内省に徹するの聲一句肺腑より出づ、悉く眞劍の文字也、親鸞聖人の御心を濾過せる『歎異鈔』の水源地をくぐりて滾々として流れ出づる實感の法水は以て萬衆信念の涸渴を醫するに足るべきを信ず、敢て體讀をのぞむ。

近角先生序文の一節
(前略)本書は君が信仰の懺悔録(中略)君が實験の披瀝である、實に是れ人生を以て紙とし骨肉を以て筆として書かれたる活文字である(下略)

絶対他力と體驗

四六版るびつき
洋裝 天金 美本
正價 金貳圓
郵税 八錢
(版二忽)

發行所 京都下市珠數屋町 丁子屋書店

◎すまじ致次取おもて於に所行發道求是書二のこ◎

近角常觀 著

信仰之余瀝

五十定價六十錢
郵税四錢

本書は明治卅年、著者が信仰經驗後、始めてその内外の秘奥を披き、告白を試みたる最初の著作である。收る處、宗教的同朋以下、涅槃の何果、蘭林の遊戯に至る廿一編、外に附録として『意譯歎異鈔』の宗教的實験の二編がある。何れも著者が久しき暗黒、苦惱より救はれて大悲光明に、直到したる體驗のした、りてあらはれない。著者が信仰の根底を知らんとせらるゝの士は、本書は是非一讀を經らるべきである。

信仰之余瀝要略

五定價十五錢
郵税四冊送二錢
部數に應じ割引

本書は某師の御依囑に基き、上記『信仰之余瀝』中の眼目たる『宗教的同朋』を『活ける懺悔』、『信界に於ける懺悔』等數篇を選び印刷して、同朋諸君が他に喜びを頒ちて下さるに最も好適の冊子ならしむ可く、發行したるものである。有志の諸賢には施本用として、は本書の御使用を願ひ度い。

近角常觀 校訂

冠頭 歎異鈔

八版
定價十五錢
郵税三冊送二錢
部數に應じ割引

この『歎異鈔』は居常釋教し易きやう校訂者が心を込めて出版せらるゝのにて、殊に校訂には嚴密の意を用ひ、且つ冠頭を加へて聖人の諸聖教中より參考すべき要文を引照し、親切な旨として作りたるものである。久しく切れておりましたが今度出来ましたからお用のを願ひ度い。

東京市本郷區森川町一丁目
振替口座東京一六六九六番
求道發行所

近角常觀 著

懺悔錄

十三版

改正定價五十錢 郵税貳錢

本書には著者が人生の暗黒にぶつつかつて苦しみましたこと、それが大慈悲の眞實に救はれ、方向一轉の信仰生活に出たこと、實験から、それが王舎城悲劇、阿闍世王の煩悶得脱にあつた、たつた、佛陀大悲の眞面目であること、著者が告白書として、著者の信仰を理解するに最も好適であります。

人生と信仰

七版

定價五十五錢 郵税四錢

目次
第一章 人生問題と信仰
第二章 倫理力行と信仰
第三章 社會問題と信仰
第四章 世界宇宙と信仰
第五章 犯罪心理と信仰
第六章 國家秩序と信仰
目次示すが如き内容で、人生、信仰を外にして解決の道ある可らざることを、その信仰が實人生に及ぼし來る力の偉大なること、それらな理解して下さるには本書を一讀願ひます。

東京市本郷區森川町一丁目
振替口座東京一六六九六番
求道發行所

近角常觀著

慈光錄

再版

定價一圓二十錢 郵稅四錢

本書は親鸞聖人の跡を慕へる著者が、信後生活に於ける衷心の懺悔感謝の披瀝である。蓋し一念徹底の信源より顯現し來る絶對救濟の眞宗教が、如何なる眞人生を開顯し來るか、本書に於て遺憾なく表白されてある。幸に著者の信仰に及まるゝの士は、著者が信後に於ける最も心力を傾注せる文字として、本書を心讀精讀あらんことを。

◇集金郵便◇

本所は「求道」前金預置讀者諸君に限り本所に於て發行の書籍は御便利集金郵便の御注文に應じます。その時は御一報下さらば、送本と同時に定價に規定の集金料を加へたる額を、直に集金便にて御請求致します。

東京市本郷區森川町一番地
振替口座東京一六六九六番

求道發行所

大正十一年五月十日發行(毎月一回發行)

求道前號要目 (十年十二月發行)

現代青年の陥り易き思想上の深牽
親鸞聖人渴仰の氣運
易往而無人……………近角常觀
解脱と常樂——眞佛土卷講話……………近角常觀
求道學舎改築趣意書

●本誌は毎月一回發行とす●誌代は總て前金拂込みのこと●送金は成るべく振替にあられたし●郵便爲替の場合には振替局は本郷區森川町局宛のこと●郵券代用は二錢切手にて一割増●宛名人は凡て求道發行所のこと

定價一部卅錢 十二冊分 一圓七十錢 (郵稅不要)

大正十一年五月七日印刷
大正十一年五月十日發行

編輯 近角常觀
印刷 近角常觀
東京市本郷區森川町一番地 耶音觀

發行所 求道發行所
電話(小石川一六四二番)振替(東京一六六九六番)